アフガニスタン女子教育支援20周年記念公開シンポジウム

紛争地域の女子教育支援を通した国際協力活動のあり方

● 報告

「アフガニスタン女子教育支援の20年間」

石井 クンツ 昌子　お茶の水女子大学理事・副学長

● 基調講演

「人間の安全保障と国際教育協力―『ここにある未来』を共に歩む」

杉村 美紀　上智大学総合人間科学部教育学科教授

● 講演

「アフガニスタンにおける統治の困難さ」

青木 健太　公益財団法人中東調査会研究員

各五女子大学の学生による国際協力活動の報告

各五女子大学の学生によるパネルディスカッション

お茶の水女子大学

アフガニスタン女子教育支援20周年記念公開シンポジウム

紛争地域の女子教育支援を通した国際協力活動のあり方

日時：２０２２年11月4日 14時～17時30分

場所：お茶の水女子大学 徽音堂

主催：国立大学法人 お茶の水女子大学

後援：文部科学省

目次

開会挨拶　4
佐々木 泰子（お茶の水女子大学長）

来賓挨拶　7
井本 佐智子（独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）理事）　8
篠原 聡子（日本女子大学学長）　11
今岡 春樹（奈良女子大学学長）　14
森本 あんり（東京女子大学学長）　18
髙橋 裕子（津田塾大学学長）　20

報告
「アフガニスタン女子教育支援の20年間」　23
石井 クンツ 昌子（お茶の水女子大学理事・副学長）

基調講演
「人間の安全保障と国際教育協力―『ここにある未来』を共に歩む」　37
杉村 美紀（上智大学総合人間科学部教育学科教授）

講演
「アフガニスタンにおける統治の困難さ」　59
青木 健太（公益財団法人中東調査会研究員）
各五女子大学の学生による国際協力活動の報告　79
お茶の水女子大学　81
津田塾大学　85
東京女子大学　88
奈良女子大学　92
日本女子大学　96
各五女子大学の学生によるパネルディスカッション　101
閉会挨拶　118
由良　敬（お茶の水女子大学グローバル協力センター長）

登壇者の所属や役職などはシンポジウムが開催された時点のものです。

開会挨拶

佐々木 泰子　お茶の水女子大学長

お茶の水女子大学文教育学部文学科国文学国語学卒業。同大学院人文科学研究科日本文学専攻及び同大学院人文科学研究科日本言語文化専攻修了。専門は社会言語学、日本語教育。お茶の水女子大学助手、助教授、教授、国際教育センター長、附属小学校長、理事・副学長を経て2021年4月より現職。

本日は、アフガニスタン女子教育支援20周年記念公開シンポジウム「紛争地域の女子教育支援を通した国際協力活動のあり方」にお運びくださいまして、誠にありがとうございます。

ご来賓の皆様 ― 独立行政法人国際協力機構ＪＩＣＡ井本理事、日本女子大学篠原学長、奈良女子大学今岡学長、東京女子大学森本学長、津田塾大学髙橋学長、そして本日ご講演をお願いしております上智大学の杉村先生、中東調査会の青木先生 ― におかれましても、御多忙の中、ご出席を賜り、誠にありがとうございます。

本学が、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学と共に五女子大学コンソーシアムを結成し、アフガニスタン女子教育支援を開始してから20年になります。この間、様々な社会環境の変化がございましたが、コンソーシアムの皆様の多大なご尽力、文部科学省、ＪＩＣＡ、外務省の皆様から強力なご支援をいただき、活動を現在につなげることができました。

おかげさまで20周年を迎え、本日、オンラインを含め、多くの方々にご参加いただいて、記念シン

ポジウムを開催できますことを大変嬉しく思っております。

この節目の年において、五女子大学コンソーシアムとして、これまでのアフガニスタン女子教育支援で得られた知見、蓄積を、アフガニスタンのみならず世界の紛争地域、開発途上国の女子教育支援にどう生かせるのか、何ができるのかを、皆様と共に考え、示唆を得たいと思い、本シンポジウムのテーマを「紛争地域の女子教育支援を通した国際協力活動のあり方」といたしました。

本日は、五女子大学コンソーシアムの各大学の学長、ご支援をいただいておりますＪＩＣＡの理事よりお言葉を賜った後、コンソーシアムの20年間の振り返りを本学よりご報告申し上げます。そして、「人間の安全保障と国際教育協力」についての基調講演を上智大学の杉村教授から賜り、「アフガニスタンにおける統治の困難さ」について中東調査会研究員の青木様からご講演をいただきます。シンポジウム後半では、五女子大学の学生の皆さんによる国際協力活動の報告、パネルディスカッションを行います。

今も世界各地で紛争が起こっていて、貧困、国内あるいは国家間の格差、ジェンダー不平等、少数者の排除、環境問題など、様々な課題が山積しています。また、コロナ禍により、２０３０年を達成年として国連が採択した「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」の進捗にも影響が及んでおります。そして、アフガニスタンでは、昨年（２０２１年）８月に政権が崩壊、反政府勢力のタリバンが全土を制圧して暫定政権を発足させるという急激な情勢の変化が起こりました。今後のアフガニスタンの女性たちについての見通しは、残念ながら明るいとは言えません。

そのような中にあって、女性、少数者等に対する教育とリーダーシップの強化に取り組んできた歴史を持つ、日本の女子大学の果たす役割は、ますます大きくなっていくものと考えております。そし

て、アフガニスタンの女子教育の重要性、紛争地域、開発途上地域における女子教育の再建、発展のために支援を続けていくというメッセージを、このシンポジウムを通じ、広く社会にお伝えしていきたいと思っています。

この点を胸に刻み、私たち五女子大学の学長は、本日、コンソーシアム協定の更新をいたしました。皆様におかれましては、引き続きこの五女子大学コンソーシアムの継続的発展に向け、ご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げ、私の開会のご挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

来賓挨拶

井本　佐智子（独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）理事）

篠原　聡子（日本女子大学学長）

今岡　春樹（奈良女子大学長）

森本　あんり（東京女子大学学長）

髙橋　裕子（津田塾大学学長）

来賓挨拶 1

井本 佐智子 氏　独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）理事

１９９３年国際基督教大学大学院行政学研究科国際機構論専攻卒業、国際協力事業団（ＪＩＣＡ、２００３年に独立行政法人国際協力機構に改組）採用。ＪＩＣＡ南アジア部南アジア第三課長、インド事務所次長、企画部国際援助協調企画室長、広報室長を経て２０２１年10月より現職。

五女子大学コンソーシアムの皆様、20周年おめでとうございます。

コンソーシアムおよびご関係の皆様は、２００２年1月のアフガニスタン復興国際会議以降、20年以上の長きにわたり、アフガニスタンをはじめ、開発途上国における女子教育の発展に貢献してこられました。ＪＩＣＡを代表いたしまして、心より感謝と敬意を表したいと思います。

この間、ＪＩＣＡも五女子大学の皆様にご協力いただき、アフガニスタンの教育関係者を日本に招いて、女子教育に関する研修を実施してまいりました。これらの研修も含め、２００２年以降、日本で研修を受けていただいたアフガニスタンの教育関係者は１５０名を超えます。

また、７００名を超える留学生を受け入れています。アフガニスタンからの留学生に占める女性の割合は年々上昇しており、今年度は初めて3割を超えました。昨年8月のタリバンによる政変後は、女性単独の国外渡航が禁じられましたので、男性親族に同行していただくなどの工夫を重ねながら、

全員が安全に来日できるよう対応してまいりました。アフガニスタンが苦難の中にある今だからこそ、未来を担う人を育てる事をやめない。ＪＩＣＡはそのように考えております。

本日のシンポジウムのテーマは「紛争地域の女子教育支援を通した国際協力活動のあり方」ということですので、「紛争地域の女子教育支援」にも応用可能と考えられる事例として、アフガニスタンの隣にあるパキスタンでの取り組みをご紹介したいと思います。

ＪＩＣＡは現在、パキスタンで「オルタナティブ教育推進プロジェクトフェーズ２」を実施しています。このプロジェクトでは、性別・年代を問わず、様々な人々に、「ノンフォーマル教育」と呼ばれる学びのチャンスを提供しています。「ノンフォーマル」と言っても、非公式というわけではなく、パキスタンの政府に認められた公式なプログラムです。実は、フォーマルという言葉には「形式的な」という意味もあります。

通常ですと、学校は、決まった年齢の子どもたちが、決まった時間に決まった場所に通うものですが、パキスタンには、様々な事情からその形式に合わせることができず、学校に通えない子どもたちがたくさんいます。また、伝統的な価値観の下では、女の子は10歳を過ぎた頃から、徐々に大人として見られるようになり、たとえ通学のためであっても、一人では外出がしづらくなっていきます。そこで、ノンフォーマル教育では、子どもたちが通いやすい場所で、子どもたちが通いやすい時期・時間帯に教室を開きます。コミュニティの中にあって、地元のお姉さんが教えてくれる学校ならば、女の子も安心して通うことができます。また、今年、パキスタンは大洪水に見舞われ、学校も被害を受けましたが、そうした地域では、学びを途切れさせないために仮設の学校が作られ、ノンフォーマル教育の教材を使った授業が行われています。このように、ノンフォーマル教育は、柔軟でニーズに合

わせた教育機会を提供する方法として、紛争地域の女子教育にも適したアプローチだと言えます。

現在、ＪＩＣＡは、国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）と協力し、パキスタン国内にあるアフガニスタン難民キャンプで、ノンフォーマル教育の学校を開設しています。パキスタン全土で約２６００人のアフガン難民の子どもたちが学んでおり、そのうち８割が女子です。

教育とは、生きる力を身に着け、自分が家族や社会に必要な存在と認められ、自分に自信を持ち、そして、人として尊厳をもって生きる上で欠かすことができないもの、とＪＩＣＡは考えます。女子教育も含め、教育の普及は、平和の実現、社会の復興、中長期の経済発展と安定の鍵となるものですので、ＪＩＣＡはこれからも、アフガニスタンや他の紛争地域における教育と人材育成に取り組んでまいります。

本日は、五女子大学の関係者の皆様とご一緒する機会に恵まれました。実は、ＪＩＣＡは多くのパートナーと協働することにより、開発途上国でのより良い協力を実現していきたい、との観点から、今年の９月に大学の皆様、開発コンサルタント、ＮＧＯ、ＮＰＯ、国際機関の方々と共に教育協力プラットフォームを立ち上げました。途上国での教育推進に向けて、引き続き、皆様のお力をお借りしたいと思っております。そして、特に紛争地域の女性・子どもたちに思いを馳せつつ、皆様と共に取り組んでまいりたいと思います。

本日はありがとうございました。

来賓挨拶 2

篠原 聡子 氏　日本女子大学学長

１９８１年日本女子大学家政学部住居学科卒業、１９８３年日本女子大学大学院修了、空間研究所主宰。１９９７年から日本女子大学で教鞭を執り、現在、日本女子大学家政学部住居学科教授。２０２０年5月より同大学学長。主な作品は、SHARE yaraicho（２０１２、住まいの環境デザイン・アワード環境デザイン最優秀賞２０１３、日本建築学会賞［作品］２０１４）、SHARE tenjincho（２０２１）など。著書に、『変わる家族と変わる住まい』（共編著、彰国社、２００２年）、『おひとりハウス』（家を伝える本シリーズ、平凡社、２０１１）、『アジアン・コモンズ』（平凡社、２０２１）などがある。

この度、アフガニスタン女子教育支援が20周年を迎え、五女子大学コンソーシアム協定が更新されましたこと、心から嬉しく思っております。

２００２年、五女子大学での女子教育支援が開始された当時、アフガニスタンでは20年以上に及ぶ戦禍によって教育システムが荒廃し、経験のある教員が難民として国外に流出するなど、教育の質の低下が著しく、加えて男女の格差という問題もあり、女子教育は危機的な状況にありました。そうした中、日本で１００年以上の伝統を持つ五つの女子大学が協力して、アフガニスタンの女子教育を支援する取り組みを開始したことには大きな意義がありました。

私たち、日本女子大学でも、多くの方々の協力を得て、アフガニスタンの指導的女子教育者の研修プログラムを実施してまいりました。附属の幼・小・中・高そして大学からなる一貫教育を実施している本学の特色を生かした、多彩な体験型研修プログラムが組まれ、ＪＩＣＡ専門家として現地に派

遣された附属高等学校の教諭が、セミナー、フォローアップ研修などを実施しました。更に、この訪問がきっかけとなり、カブールにあるマリアム女学校の生徒の附属高等学校への短期留学も実現いたしました。この招聘事業は、２０１６年まで10年にわたって隔年で続けられ、アフガニスタンの高校生が日本の高校の現場、生活を体験するとともに、附属高等学校の生徒たちがアフガニスタンの女子高校生との交流を深める機会となりました。

大学では、２００３年にカブール大学と大学協定を締結いたしました。これは、アフガニスタンの大学と日本の私立女子大学との間で締結された初めての協定でした。翌年の２００４年には、カブール大学の若手助教授が国費留学生として理学研究科博士課程前期に入学されました。そして、博士課程後期に進学して生物学分野の研究に没頭され、博士号を取得した後、帰国して母校のカブール大学で教授として後進の指導に当たられました。まさに、五女子大学による女子教育支援の一つの成果と言えると思います。

しかしながら、先程もお話があったように、昨年8月、タリバンの侵攻によって状況は一変しました。命の危機に直面した彼女は、国を逃れ、現在は海外で暮らしています。私たちも一向に改善しない状況に時として無力さを痛感せざるを得ない日々ですが、彼女からは、「日本で過ごした月日をかけがえのないものとしている。そして、希望を失わずに前を向いて必死に生きています」というメールもいただいています。彼女の言葉に励まされ、女子教育支援が今後益々必要になってくると、強く確信した次第でございます。

気候変動や難民そして新型コロナウイルス感染症の拡大等、現在の地球社会において、私たちは数多くの問題に直面しており、女性がより深刻な影響を受けているという現状があります。女性にとっ

ての知の拠点である女子大学が力を合わせ、これらの問題に取り組むことが、これからますます必要になるでしょう。

本学は、今後も五女子大学コンソーシアムのメンバーとして、グローバルな視点で女子教育の発展に尽くしてまいりたいと思います。

来賓挨拶 3

今岡 春樹 氏　奈良女子大学長

1981年東京工業大学大学院総合理工学研究科システム科学専攻修士課程終了、通商産業省工業技術院繊維高分子材料研究所へ通商産業技官として採用。工学博士（東工大論博）、奈良女子大学家政学部助教授、同生活環境学部助教授、同教授、同学部長を経て2013年4月より現職。

皆さんこんにちは。奈良女子大学の今岡です。この度アフガニスタン女子教育支援20周年の記念シンポジウムが行われることを大変嬉しく思っています。

「20年」というと短いようにも感じられますが、色々なことがありました。国立大学が法人化されて19年になりますので、五女子大学コンソーシアムのプロジェクトが始まったのは、その直前ということになります。

現在、アフガニスタンはタリバンの統治下にあり、女性の教育環境が大変心配です。ただ、タリバンが政権を掌握してから1年あまりが経過して、やや状況が落ち着きつつあり、今年（2022年）の9月末には、在アフガン日本大使館が業務を再開したというニュースが入りました。そうはいっても、決して安心はできないと思っています。

私からは、奈良女子大学の国際交流ということで、20年前のアフガニスタンとの交流を少し振り返

りまして、最近は同じイスラム圏のバングラデシュで同じようなプログラムを実施していますので、その紹介をして挨拶に代えさせていただきたいと思います。

大雑把な言い方にはなりますが、アフガニスタンの人口は約４千万人で、日本のおよそ3分の1です。一方、国土面積は日本の2倍ぐらいあります。宗教はイスラム教で、一人当たりの名目ＧＤＰ（国内総生産）は６００ドル前後です。日本は約４万ドルですから、大きな開きがあるわけです。

先ほど、日本女子大学の篠原先生から大学協定のお話がありましたが、奈良女子大学は、２００３年3月に、カブール大学とアフガニスタン教育大学の二校と国際交流の協定を締結し、その年の10月から国費留学生を修士課程に受け入れました。新年度が始まる半年前に来ていただき、実質2年半で、いわゆる修士号を取得することを目的としたプログラムでした。

２００３年から4年続けて、カブール大学から若い先生がお一人ずついらっしゃいました。その後少し間があり、トータルで5名の方が本学の修士課程を修了され、帰国してカブール大学に復職されたと聞いています。しかしながら、現在は、先ほどからお話に出ているような政情の変化によって、カブール大学には先生がほとんど居なくなっていて、教育を再開するにも、指導者のレベルの低下が懸念されている状況にあると聞いています。

また、２００２年度から２００４年度までは、アフガニスタンの指導的女子教育者のための研修が、五女子大学コンソーシアム主導で実施されました。研修生はすべて女性で、20名、16名、15名が来日して、五女子大学を訪問されたという記録が残っています。

続いてバングラデシュのお話をいたします。バングラデシュの人口は1億6千万人で、日本よりも少し多いのですが、国土面積は日本の半分以下です。宗教はイスラム教ですが、アフガニスタンとは

少しタイプが違うようで、現在のハシナ首相は女性です。公用語はベンガル語ですが、かつてはイギリス領だったこともあり、教育を受けた層は、英語を流暢に話します。一人当たりの名目ＧＤＰは２５００ドルで、やはり日本とは大きな差があります。

奈良女子大学は、まず２００３年８月にバングラデシュ農科大学と協定を締結しています。少し間をおいて、２０１４年にチッタゴン大学、２０１７年にダッカ大学とも締結しました。

チッタゴン大学の場合は、教員同士の交流からスタートしました。一人は森林学分野の方です。バングラデシュでは、学問としての森林学が極めて重要視されているのです。そして、もう一人は社会学者で、産業と社会の関係について研究している方でした。私どもは、ＪＳＴ（科学技術振興機構）のさくらサイエンスプログラムを活用させていただいて、２０１７年から毎年、チッタゴン大学の学生10名と教員2名に1週間ほど大学に来ていただき交流しています。この間には学長先生も来られました。

ダッカ大学に関しては、先ほどお話ししたアフガニスタンのケースと非常によく似ていて、毎年1名の学生を2年間の修士課程に受け入れています。これまでに4名を受け入れ、2人が修了し、2人が在学中です。来年の4月から入って来る学生も決まっています。

バングラデシュと日本では経済的に大きな違いがありますので、誰かがサポートをしないと留学というシステムを実施することはできません。実際に、私が現地に行って、大学の先生とお会いした際に、日本の物価の話をしたところ、「こちらから仕送りをするのは無理だ」と言われました。やはり何らかのスカラーシップが必要だということになり、本学では、学費を免除するだけではなく、寄付金を使いまして、生活費を支給しています。ですから、受け入れ人数は一人が限界ですけれども、卒

業生はその後、華々しく活躍をしていると聞いていますので、20年前のアフガニスタンのメソッドが生かされたと考えております。

最近、イスラム圏から時々コンタクトがあります。考えようによっては、イスラム圏というのは、ある意味で日本とは非常に親しい間柄ですので、そういう国で勉強してみたいという心理的背景もあるようです。ですから、まだまだ日本の女子大学が活躍できるフィールドがあるのではないか、今後もコンソーシアムとして連携して、そういうことに取り組み続けていきたいと思っております。

今日はありがとうございます。

来賓挨拶 4

森本 あんり 氏　東京女子大学学長

1979年国際基督教大学卒業。東京神学大学、プリンストン神学大学を修了(Ph.D.)。専門は神学・宗教学・アメリカ研究。1991年国際基督教大学大学牧師、1997年準教授、2001年教授。2012年より2020年まで学務副学長、2022年名誉教授。2002年プリンストン神学大学、2010年バークレー連合神学大学院でそれぞれ客員教授を務める。日本私立大学連盟教学担当理事者会議幹事会委員長、アジア・キリスト教高等教育合同財団理事を歴任。近著に『反知性主義』『不寛容論』(新潮選書)『異端の時代』(岩波新書)など。2022年4月より現職。

東京女子大学の森本あんりです。今年の4月に学長に就任をいたしましたので、アフガニスタン女子教育支援のイベントに参加するのは、今回が初めてでございます。参考として、2017年に開催された、15周年記念の公開シンポジウムの記録を読ませていただきました。この時には、当時の学長小野祥子先生が登壇してご挨拶申し上げております。

ほんの5年前のことですが、当時の世界と今我々が暮らす世界との間には、大きな溝が存在するように感じます。新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大、そしてウクライナへの軍事侵攻のことを考えますと、5年前の世界は平和で安全であったかのように感じられます。しかし、実際には、決してそのようなことはなく、その時々で、深刻かつ重大な課題に直面していたわけです。

私がこの3月までおりました大学では、シリアからの難民を受け入れていました。数名いらっしゃいましたが、大学のホームページ等では一切公表していません。本人だけでなく祖国に残されている

家族の安全を考えますと、名前や顔写真を出すことには慎重を期さなくてはならないからです。大学は、広報や宣伝のためではなく、ただ純粋に戦禍に苦しむ学生たちを受け入れる、そういう方針でした。

現在、東京女子大学では、ウクライナから避難してきた女子学生1名が学んでいますので、やはり、安全には十分配慮しなければなりません。こちらに到着したばかりの彼女に面会した時には、救急車のサイレンが聞こえただけで空襲警報を思い出して、強い不安や緊張を感じている様子でした。学内寮で暮らし始め、周りの学生たちと親しくなるにつれて、少しずつ、安心して日本で暮らせるようになり、学びに心を向けることができるようになってきています。

アフガニスタンの女子教育も、同様に難しい課題がございます。とりわけ、ムスリム文化における女性の位置づけを考えますと、私たちが無遠慮に援助の手を差し伸べるならば、それこそ価値観の押し付けと言われてしまいそうです。日本に留学生を送りだすと、政府はアフガン女性を異国に売りさばいたと非難され、留学を終えて帰国すると、異教徒の習慣を身に着けた家の恥だと蔑まれる。そういう現実があるわけです。女子教育の問題は、とりもなおさず男性たちの問題に他なりません。そういう困難な状況の中で、我々は何をすることができるのか？ その小さな一歩を示してくれるのが、本学の五嶋友香さんです。後ほど、日本に暮らすムスリムの子どもたちへの学習支援についての報告がありますので、皆様とご一緒に聞きたいと思います。

今日は、この貴重な20周年の記念シンポジウムにお招きいただきまして、ありがとうございます。特に、リーダーシップをとってくださるお茶の水女子大学の佐々木泰子学長に感謝申し上げたいと思います。今後も五女子大学で歩調を合わせて協働し、できる事を進めていきたいと考えておりますので、皆様どうぞよろしくお願いいたします。

来賓挨拶 5

髙橋 裕子 氏　津田塾大学学長

津田塾大学学芸学部英文学科卒業。筑波大学大学院（国際学修士）、米・カンザス大学大学院にてM.A.及びPh.D.を取得。１９９７年から津田塾大学専任教員、２０１６年より同大学長。専門はアメリカ社会史（家族・女性・教育）、ジェンダー論。著書に『津田梅子―女子教育を拓く』（岩波ジュニア新書、２０２２年）、『津田梅子の社会史』（玉川大学出版部、２００２年、アメリカ学会清水博賞）、共編著に『女性学長はどうすれば増えるか―国内外の現状分析と女性学長からのメッセージ』（東信堂、２０２２年）等。International Federation for Research in Women's History会長、ジェンダー史学会代表理事、日本学術会議会員、日本私立大学連盟常務理事、文部科学省大学設置・学校法人審議会会長。

津田塾大学学長の髙橋裕子でございます。今日はこうして、お茶の水女子大学において、アフガニスタン女子教育支援のための五女子大学コンソーシアム協定の20周年記念シンポジウムを開催していただきましたことに深く感謝申し上げます。

20年前の２００２年、アフガニスタン女子教育支援のための五女子大学コンソーシアム協定締結のシンポジウムがこの徽音堂で行われました。五女子大学の5人の女性学長がこの壇上に着席していらっしゃいました。私は当時、担当の委員を拝命しておりましたので、客席に座って、お話をお聴きしたことを今でもはっきりと覚えております。

今までお話をされた先生方とは少し角度を変えてお話ししますと、お茶の水女子大学の本田和子先生と奈良女子大学の丹羽雅子先生は、それぞれの大学の初の女性学長でいらっしゃいました。そして、

東京女子大学の湊晶子先生は、東京女子大学が新制女子大学に昇格後、初の女性学長でいらっしゃったかと思います。戦前には安井てつ先生が学長の任に就かれていますが、戦後としては初の女性学長でいらっしゃいました。

そういう意味では、私たち自身も振興の途上にあるという認識でいなければならないと思います。20年前、日本の女性の高等教育機関は、いくつかの女子大学において、「初の」女性学長が誕生するような状態であったことを、私たちはしっかりと記憶しておく必要があると思います。

２００２年に、私はアフガニスタン教育支援現地事前調査団の一員として、一週間ほどカブールにまいりました。今日は、その時にご一緒した、当時お茶の水女子大学の教授でいらした藤枝修子先生、当時奈良女子大学附属高等学校、中学校の先生でいらした中道貞子先生が客席にご着席くださっています。団長は藤枝先生が、副団長は当時東京女子大学の教授でいらした西原鈴子先生がお務めくださいました。総勢８名でしたので、今日は、８分の３がこの徽音堂に居るということでございます。この時には本当に貴重な経験をさせていただきました。凝縮された日々を、生涯忘れることはないと思います。これは、私だけではなく、たぶん調査団の先生方全員がそうだと思っております。

私たちはその経験を踏まえて、アフガニスタンから女性教員をお迎えして、研修プログラムをデザインしました。そして、五女子大学で協働して、お茶の水女子大学、日本女子大学、東京女子大学、津田塾大学を訪問した後、奈良女子大学に移動して、様々なプログラムを体験していただきました。あの時ご参加くださった、アフガニスタンの女性教員の方々は今どうしていらっしゃるかと、アフガニスタンの本当に厳しい情勢を耳にする度に考えます。そして、実質的な教育支援ができない現在の状況に、一日も早く変化が訪れることを願います。

ジェンダーギャップの課題は、私たち自身の問題でもあること、私たちもジェンダーギャップ指数が低迷している国で生きていることを忘れてはならないと思います。そのうえで、この20年間、大きなチャレンジであることを踏まえながら、アフガニスタンの女子教育支援に携わることで、多くのことを学び、五女子大学の関係者が大きく成長できたことを、本日、五女子大学の学長が顔を揃えているこの場で確認しておきたいと思います。

併せまして、この五女子大学コンソーシアム協定の締結によって、五女子大学の横のつながりがより強固なものになったこと、これも貴重なことであると考えております。女子教育に特化した女子大学であるからこそできることを共に確認し、それらを更に刷新して行く。そして、女子大学の存在意義を五女子大学が一丸となって発信していく。こうしたことにより、女性の社会参画が、日本や世界で推進されるよう力を合わせて行くことが重要であると思います。そのことを確認しながら過ごしてきた20年間であったと思います。

21世紀の半ばに向けて、アフガニスタンの、そして紛争下に置かれている国々や地域の平和の回復を願いつつ、私たち五女子大学の更なる躍進を祈念して、私の挨拶といたします。

本日は誠にありがとうございました。

報告

「アフガニスタン女子教育支援の20年間」

石井 クンツ 昌子 氏　お茶の水女子大学理事・副学長

カリフォルニア大学リバーサイド校社会学部で20年間教鞭を執った後、２００６年にお茶の水女子大学着任、２０２１年より現職。専門は社会学。２０１２年「Jan Trost賞」受賞。日本家族社会学会会長、日本学術会議連携会員などを歴任。

アフガニスタン女子教育支援
20周年記念公開シンポジウム

アフガニスタン女子教育支援の20年間

2022年11月4日
お茶の水女子大学理事・副学長（国際交流担当）
石井クンツ昌子

図1

本日のお話

1. アフガニスタン女子教育支援 の背景と経緯
　～五女子大学コンソーシアム協定の締結～
2. 五女子大学コンソーシアムの取組み
3. お茶の水女子大学としての取組み
4. 成果と課題
5. 今後に向けて

皆様、こんにちは。お茶の水女子大学副学長の石井でございます。本日は、アフガニスタン女子教育支援20周年記念公開シンポジウムにお運びくださいまして、誠にありがとうございます。お忙しい中ご出席を賜りましたご来賓の皆様にも、心から御礼を申し上げます。

先程、佐々木学長からお話がありましたように、本学が津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学とともにコンソーシアムを結成し、アフガニスタン女子教育支援を開始してから20年を迎えました。ここでは、少しお時間をいただきまして、「アフガニスタン女子教育支援の20年間」と題し、私からご報告申し上げたいと思います。

最初に、アフガニスタン女子教育支援の背景と経緯、五女子大学コンソーシアム協定が結ばれるに至ったいきさつを振り返り、五女子大学コンソーシアムと本学の具体的な取組みをご紹介します。そして、その成果と課題、今後の展望についてお話し申し上げたいと思います（図1）。

1. アフガニスタン女子教育支援の背景と経緯
～五女子大学コンソーシアム協定の締結～

はじめに、アフガニスタン女子教育支援の背景と経緯、五女子大学コンソーシアム協定が結ばれるに至ったいきさつについてお話をさせていただきます。

図2

1. アフガニスタン女子教育支援の背景と経緯
～五女子大学コンソーシアム協定の締結～①

アフガニスタンを巡る状況

(1) 1970年代後半からの戦乱状態、難民・避難民・寡婦・孤児など増加、女性の生活が極めて困難な状況
(2) 2002年1月「アフガニスタン復興支援国際会議」@日本
- 日本が重点的に貢献すべき分野：紛争と抑圧の主たる犠牲者である「女性の地位向上」
- 「女性の権利を回復し、女性のニーズに対処することが核心であり、女性の権利及びジェンダーの問題は、復興プロセスにおいて十分に反映されるべきである」（共同議長最終文書）

(3) 国連「婦人の地位委員会」において「アフガニスタン女性に対する支援を積極的に推進する」決議採択

アフガニスタンは、１９７９年から20年以上にわたって戦乱状態が続いたことにより、多くの国民が難民や国内避難民となり、寡婦や孤児が増加しました。特に女性の生活が極めて困難な状況になったことは、皆様ご想像いただけるかと思います。

２００２年1月、日本におきまして、「アフガニスタン復興支援国際会議」が開催され、今後の復興支援において日本が重点的に貢献すべき分野として、紛争と抑圧の主たる犠牲者である「女性の地位向上」が挙げられました。共同議長の最終文書にも「女性の権利を回復し、女性のニーズに対処することが核心であり、女性の権利及びジェンダーの問題は、復興プロセスにおいて十分に反映されるべきである」と記載されております。

また、２００６年に開催された国連「婦人の地位委員会（ＣＳＷ）」の第50回会合におきましても、「アフガニスタン女性と女児の状況」と題した決議が合同採択され、「アフガニスタン女性に対する支援を積極的に推進する」ことが表明されています（図２）。

改めてご説明するまでもないことですが、女性の地位向上、すなわち様々な分野で女性たちが自ら力をつけていくための基本は教育です。これは、どの国でも認識されていることだと思います。

アフガニスタンの復興支援におきましても、女子教育の再建が重要視され、様々な議論がなされてまいりました。まずは、女性の就学率、識字率を上げ、

図3

1. アフガニスタン女子教育支援の背景と経緯
～五女子大学コンソーシアム協定の締結～②

女子教育再建を巡る議論

教 育＝様々な分野で女性たちが自ら力をつけていくことの基本

- 生涯にわたる女性の教育・学習の保障が重要
- 女性の就学率、識字率、自己表現能力の向上
- 今後の復興と開発を担う女性人材の育成

校舎の整備が進んだナヒート・シャヒード学校
（2002年8月31日）

自己表現能力を向上させ、今後の復興と開発を担う女性人材を育成していかなくてはなりません。そのためには、初等・中等教育、高等教育、社会教育等、生涯にわたる女性の教育と学習の機会を保障することが極めて重要であります（図3）。

そこで、アフガニスタンの女子教育の再建においては、具体的には、次の6点を柱とした教育支援を行うことになりました。

（1）施設・設備及び教材の整備
（2）女子が学ぶことに理解がない親に対する啓発の促進
（3）教員の養成・再教育等の支援
（4）初等・中等教育課程における指導的女性教員の日本における研修
（5）校長、教育行政に関わる人材の学校経営等に関する研修
（6）高等教育課程における女性教員・学生の留学生としての受入れ

これからお話しする五女子大学コンソーシ

図4

1. アフガニスタン女子教育支援の背景と経緯～五女子大学コンソーシアム協定の締結～③

教育支援の具体策

- 施設・設備及び教材の整備
- 親に対する啓発促進
- 教員の養成・再教育等の支援
- 初等・中等教育課程における指導的女性教員の本邦研修
- 校長、教育行政に関わる人材の学校経営等に関する研修
- 高等教育課程における女性教員・学生を留学生として受入れ

図5

1. アフガニスタン女子教育支援の背景と経緯～五女子大学コンソーシアム協定の締結～④

2002年1月：遠山敦子文部科学大臣・本田和子 本学学長会談

⇒ アフガニスタン女子教育支援に関する検討を開始

- **WG 結成**・JICA、NGO等から専門家を招きリサーチ
- アフガニスタン女子教育に携わる指導的教員
  ・教育関係者を招き研修プログラム策定
- アフガニスタン女子教育支援実施のための
  5女子大学の学長会議開催（2002年4月12日）

遠山文部科学大臣（中央・2002年当時）

2002年5月17日：五女子大学コンソーシアム協定締結

アムでは、特にこの中の（4）から（6）に力を入れてまいりました（図4）。

話が少し前後しますが、2002年1月に、当時の文部科学大臣 遠山敦子氏と本学の本田和子学長が会談され、遠山大臣から、「お茶の水女子大学はアフガニスタンの女子教育支援を手伝いますか?」というお問いかけがありました。本田学長は、即座に「やります」とおっしゃったそうです。そして、大学に戻るとすぐに、「お茶の水女子大学はアフガニスタン女子教育に協力する」という決意表明をなさいました。それに呼応して、「ぜひやりましょう」「社会のために私たちは役に立ちたい」と立ち上がった方の多くは女性教員でした。

本学の中に、ワーキンググループが立ち上げられ、JICA、NGO等から専門家を招いてリサーチを開始しました。そして、アフガニスタンから女子教育に携わる指導的教員・教育関係者をお招きして研修を実施するためのプログラムを策定することになりました。

しかしながら、これは本学だけで成し遂げることができる事業ではありませんでした。そこで、本田学長は、当時親交のあった四つの女子大学の学長に自ら電話をかけ、「女子教育の先進国として、共にアフガニスタンの女子教育支援をしていきましょう」と呼びかけられたそうです。そして皆様のご同意を得て、五女子大学コンソーシアムが結成される運びとなりました（図5）。

2002年5月17日、「五女子大学コンソーシアム協定」が締結されました。

図6

1. アフガニスタン女子教育支援の背景と経緯～五女子大学コンソーシアム協定の締結～⑤

五女子大学コンソーシアム協定　（2005,2011,2017、2022年更新）

2002年締結時の協定

（写真左から）　神田聖大学 吉村尚子学長、お茶の水女子大学 本田和子学長、高宮女子大学 渡邊子学長、宮島女子大学 丹羽朋子学長、日本女子大学 後藤裕子学長（いずれも2002年当時）

5女子大学が手を携え、女子高等教育機関としての経験と知見を活用し、アフガニスタンの女子教育普及・発展に貢献するための国際協力活動を開始

こちらにお示ししているのは（図6）、その時の協定書とサインをなさった五人の学長の皆様です。先ほどの髙橋先生のお話にもありましたとおり、全員が女性でした。歴史的に見ても、あまり例のないことではないかと思います。皆で手を携え、これからのアフガニスタンの女子教育を支えていこうと決意された勇気ある女性学長の方々です。

そして、つい先ほど、この五女子大学コンソーシアム協定を更新いたしました。現在の五女子大学の学長が更新の協定書にサインし、今後もまた共に頑張っていこうと、決意を新たにしたところでございます。

2. 五女子大学コンソーシアムの取組み

五女子大学コンソーシアムは様々なことに取組んでまいりました。その中からいくつか紹介させていただきます。

五女子大学コンソーシアムは、特に指導的女子教育者研修と女性教員研修の2点に力を入れてまいりました。

先ほど髙橋先生のお話にもありましたように、まず２００２年に文部科学省、ＪＩＣＡのご支援のもと、事前調査団が派遣され、アフガニスタン側に提示する研修プログラムの原案作りが始まりました。２００２年11月には、アフガニスタン側の責任者7名の事前研修が日本で実施され、受け入れ大学の視察と研修プログラムの原案の検討が行われました。

図7

2. 五女子大学コンソーシアムの取組み①

研修の企画・準備

文科省・JICA支援のもと

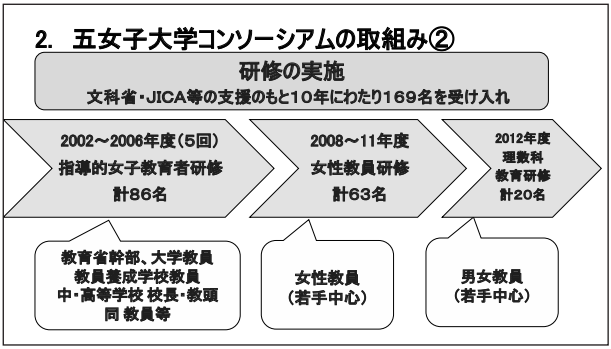
- **事前調査団派遣**
- **事前研修実施（アフガニスタンから関係者を招聘）**
- **「アフガニスタン女子教育のための女性教員研修プログラム策定検討委員会を設置**

そして、「アフガニスタン女子教育のための女性教員研修プログラム策定検討委員会」が組織されました。メンバーは、当時、本学の理学部教授で、附属高等学校の校長も兼任されていた藤枝修子先生を委員長とし、大学教員10名、国際機関で活躍する専門家1名、ＮＧＯの専門家1名、アフガニスタン情勢に詳しい研究者1名、在日アフガニスタン人の教員1名の合計14名でした。先ほど髙橋先生がご紹介くださいましたように、藤枝先生は本日この会場にお越しくださっています。この委員会には、文部科学省、外務省、ＪＩＣＡがオブザーバーとして参加してくださり、様々な議論を重ねて、アフガニスタンの女子教育に適した新しいカリキュラム・プログラムが策定されていきました（図7）。

実際に、どのような形で研修が実施されたかといいますと、まず、２００２年から２００６年度は、５回にわたり指導的女子教育者の研修を行い、アフガニスタンから教育省幹部、大学教員、教員養成学校教員、中・高等学校の校長、教頭、教員、計86名を招聘しました。２００８年度から２０１１年度にかけては、若い方を中心に63名の女性教員をお招きして研修を行いました。２０１２年度には、理数科教員の研修ということで、やはり若手の方々を中心に、男性も含め20名をお呼びしました。結果として、10年間にわたり、１６９名の方々を受け入れ、研修を実施したということになります（図８）。

この研修プログラムの特徴として、日本の女子教育の歴史と経験を踏まえて

図8



プログラムを策定したこと、最初に女性指導者を招聘したこと、の2点が挙げられます。そして、より効果的にプログラムを実施するために、学校訪問や授業の視察を重視いたしました。さらに、学校以外にも多様な教育機関を訪問する機会を設けましたので、教育の様々な側面を知っていただくことができたのではないかと思っております。その一方で、女性教員が活躍できるような環境を整えていくことにも力を注ぎました。

こうした支援はアフガニスタンの現状に即したものでなくては意味がありませんので、「現地ニーズを踏まえたプログラム作り」を心がけ、必要に応じて改善してまいりました。そして、現地に行ってフォローアップ研修を行うことにより、裨益の拡大を図ったわけでございます。

こうした事業が、五女子大学コンソーシアムによって効果的に実施されてきたと考えております。参加してくださった先生方、そして省庁の方々お一人お一人が、非常に高い志を持ってこの事業にご協力くださいました（図9）。

こちらにお示しした写真（図10）のように、様々なプログラムが、多くの方々のご協力・ご

図9

2. 五女子大学コンソーシアムの取組み③

研修の内容と特徴

（1）日本の女子教育の歴史と経験・現地ニーズを踏まえたプログラム：
- ◆日本の経験の共有（女子教育における困難、戦後日本の教育再建）
- ◆女子不就学の原因についての比較検討
- ◆女子教員の役割・育成の重要性に着目（女性指導者招聘、女性教員が活躍できる学校運営経験の共有、女性のリーダーシップ関連の議論）

（2）学校訪問・授業観察重視・多様な教育機関視察
- ◆小学校～高等学校授業観察（理科、家庭科、語学・情報、総合学習などの教授法事例）
- ◆五女子大学・協力大学・国公私立小・中・高等学校、特別支援学校、複式学級、幼稚園・保育園、家庭訪問、教員、学生との訪問・交流

（3）現地フォローアップによる裨益の拡大
- ◆フォローアップ研修（2003年3回）・教員養成調査（2003年2回、2004年）
- ◆「こころのケア」ワークショップ（2006年）

五女子大学コンソーシアムにより効果的に事業実施

図10

支援で実現したわけでございます。

現在では、五女子大学コンソーシアムの取組みは、アフガニスタンの女子教育支援のみならず、他の開発途上国への支援、教材作成、途上国支援・国際協力に関する教育活動等へと広がっています（図11）。

こちら（図12）に、五女子大学の学生さんによる国際協力活動の例を少し紹介しております。後ほど、学生さんから直接ご報告がありますので、ぜひお聴きいただきたいと思います。

3. お茶の水女子大学としての取組み

ここで、少しお時間をいただきまして、お茶の水女子大学の取組みを簡単に紹介させていただきます。

本学では、アフガニスタンの女子教育支援を始めるにあたり、２００３年７月に、女子教育を通じて国際協力を促進するための活動拠点として「開発途上国女子教育協力センター」を設置いたしました。その使命は、「国籍や年齢を問わず、女性たちの成長とその資質能力の開発

図11

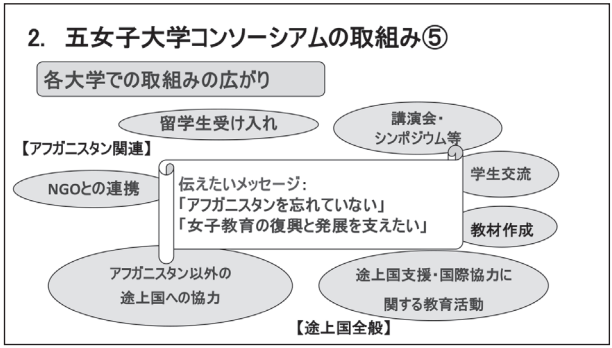


図12

を支援」することでした。

ちょうど同じ時期に、文部科学省から「東南アジア諸国の乳幼児教育システム構築」の要請がありましたので、開発途上国女子教育協力センターは、「女子教育協力研究部門」と「幼児教育協力研究部門」の２分野に分かれて活動していくことになりました。幼児教育協力研究部門の活動には、その後さらに「西アフリカ諸国の乳幼児教育システム構築」が加わり、対象地域・分野を見直し、ＪＩＣＡのご支援を得て研修が継続しているところでございます。

開発途上国女子教育協力センターは、２００８年に「グローバル協力センター」と改称し、アフガニスタンのみならず困難な状況にある開発途上国に対し、本学の知見を生かした支援・協力活動を継続しております（図13）。

時間の都合上、詳細な説明は省略いたしますけれども、本学は、「学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する」というミッションのもと、多岐にわたる活動を行って参りました。

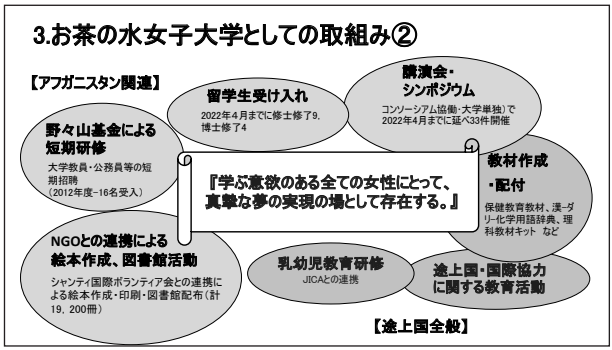
図13

3.お茶の水女子大学としての取組み①

2003年7月 「開発途上国女子教育協力センター」設置
（2008年「グローバル協力センター」と改称）

- ◆「女子教育を通じての国際協力」を促進するための活動拠点：
  使命：国籍や年齢を問わず、女性たちの成長とその資質能力の開発を支援
- ◆ アフガニスタンをはじめとする困難な状況にある開発途上国に対する教育・研究支援協力活動を継続
- ◆「東南アジア諸国の乳幼児教育システム構築」（乳幼児保育支援と女子教育支援を統合）、「西アフリカ諸国の乳幼児教育システム構築」開始
  → 対象地域・分野を見直し研修継続（JICAとの連携）

図14



アフガニスタン関連では、本学卒業生の故野々山恵美子様からの御遺贈を原資として設立された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」というものがございまして、それを活用して、アフガニスタンの女性教員等の研修、女子教育機関への図書寄贈、そして本学内での開発途上国の女子教育に関する調査・研究・情報発信等の活動を行ってまいりました（図14・15）

4. 成果と課題

次に、これまでの教育支援や協力活動による成果と今後の課題について、少しお話をさせていただきます。

ここまでご報告申し上げたような活動を通じて、私ども五女子大学は、「アフガニスタンのことを忘れてはいない」「継続して女子教育の復興と発展を支えたい」というメッセージを発信し続けてまいりました。そして、アフガニスタンの女子教育に関する情報をアップデートし、必要に応じて研修プログラム等の改善を重ねました。結果として、アフガニスタンの女子教育の再建と女性の活躍促進を担う女性リー

図15

図16

4.成果と課題

【成果】
- ◆ 日本の女子教育の蓄積に基づいたアフガニスタン支援への貢献が実現
- ◆ アフガニスタン女性教員の学び（指導法、学校運営、女性のリーダーシップなど）が実現
- ◆ アフガニスタン女性教育支援を契機として、五女子大学で国際協力に関する多様な取組みが展開（SDGsや途上国に関する勉強会、スタディツアーなど）

【課題】
- ◆ アフガニスタンの女子教育に関する情報収集の困難さ
- ◆ 地方への裨益の困難さ・限界（中央・地方の格差）
- ◆ 治安悪化・政変による活動の制約

ダーの育成に多少なりとも貢献できたのではないかと思っております。この成果は、五女子大学コンソーシアムの協働や、文部科学省、外務省、ＪＩＣＡ等のご支援の賜物であることを改めてお伝えし、関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

もう一つの成果として、アフガニスタンの女性に対する教育支援が、我々自身が今後の国際協力の在り方を考える契機になったということがございます。この取組みをきっかけに、各大学でさらに新たな支援が推進されるようになりました。

一方で、現在のアフガニスタンの情勢から、五女子大学コンソーシアムは、重大な課題に直面しています。

まず、アフガニスタンの女子教育の現場に関する情報が圧倒的に不足しております。当初は、事前調査団を派遣したり、フォローアップ研修に行ったりして、現地で直接情報を収集することができましたけれども、現時点ではそのようなことは期待できません。

特に、昨年8月以降、アフガニスタンの状況は刻々と変化しておりますので、それを踏まえつつ、どのように女子教育の支援に取り組んでいくのか。20周年の節目を迎え、五女子大学として、この点をもう少し詰めていかなければいけないだろうと考える次第でございます。

これまでの取組みを通して明確になったもう一つの大きな課題は、アフガニ

図17

5.今後に向けて

(1)アフガニスタン女子教育支援で得た知見を他紛争地域・開発途上国の女子教育復興・発展支援に生かす方策を検討：SDGs(国連・持続可能な開発目標)への貢献

(2)アフガニスタン女子教育の重要性、支援継続の必要性をメッセージとして伝える

(3)女性、少数者等に対する教育とリーダーシップの強化に取り組んできた歴史を持つ日本の女子大学の果たす役割を模索

国連持続可能な開発目標(SDGs)

スタンでは、地方と都市部の格差がとても大きく、地方ほど女子教育に対して否定的な考え方を持つ方が多いことでございます。そのため研修の成果を地方にまで波及させることがなかなかできないのが現状です。タリバン暫定政権下において、何らかの形で女子教育支援を展開できる可能性が生じた場合には、この点についての対策も検討する必要があると考えております（図16）。

5．今後に向けて（図17）

最後に、今後の展望を簡単にお話ししたいと思います。

今も世界では紛争が起きていますし、貧困、国内あるいは国家間における格差、ジェンダー不平等、少数者の排除、環境問題など、課題が山積しております。そして、コロナ禍の影響は、国連が採択した「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）の達成にも及ぶと言われています。

そのような中にあって、女性、少数者等に対する教育とリーダーシップの強化に取り組んできた歴史を持つ日本の女子大学の果たす役割は、更に大きくなっていると考えられます。私たちは、これからも、アフガニスタンの女性たちを、そして、開発途上国の様々な問題を抱えた女性たちを支援してまいります。そのためには、これまでのアフガニスタン女子教育支援で得た知見を、他の紛争地域・開発途上国の女子教育支援にも生かす方策を検討していくことも必要だろうと考えております。

残念ながら、アフガニスタンの女性たちを取り巻く現在の状況は、けっして明るいとは言えません。そのような中で、私どもは、本シンポジウムを通して、アフガニスタンにおける女子教育の重要性について、そして紛争地域における女性の教育支援のあり方について、広く社会に向けて、メッセージを発信したいと思っております。

アフガニスタンをはじめとする紛争地域の女子教育の再建と発展、さらに他の途上国における女子教育の発展に向けて、われわれ五女子大学コンソーシアムは活動を継続してまいりますので、引き続き、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

ご清聴いただきありがとうございました。

基調講演

『人間の安全保障と国際教育協力
―「ここにある未来」を共に歩む』

杉村 美紀 氏　上智大学総合人間科学部教育学科教授

上智大学総合人間科学部教育学科教授。国連大学サステイナビリティ高等研究所客員教授。日本学術振興会学術システム研究センター主任研究員。博士（教育学）。専門は比較教育学、国際教育学。２０１６年から２０２２年までユネスコ国内委員会委員を務めた他、２０１７年から日本比較教育学会長、世界比較教育学会理事、２０１８年からＪＩＣＡ緒方貞子平和開発研究所客員研究員を務めている。２０２２年にユネスコの「１９７４年勧告」改訂に関する国際専門家委員に選出された。

アフガニスタン女子教育支援20周年記念公開シンポジウム
紛争地域の女子教育支援を通した国際協力活動のあり方

人間の安全保障と国際教育協力
ー「ここにある未来」を共に歩むー

2022年11月4日
お茶の水女子大学徽音堂

杉村美紀
上智大学総合人間科学部教育学科（比較教育学、国際教育学）

ただいまご紹介にあずかりました、上智大学の杉村と申します。本日は、アフガニスタン女子教育支援20周年記念公開シンポジウムにお招きいただきまして本当に光栄に存じます。

主催校のお茶の水女子大学の佐々木学長をはじめ、グローバル協力センターの皆様、また、ご臨席いただいているご来賓のＪＩＣＡの井本理事、日本女子大学の篠原学長、奈良女子大学の今岡学長、東京女子大学の森本学長、そして津田塾大学の髙橋学長をはじめ、ご関係の皆様に心よりお礼申し上げます。本日、五女子大学のコンソーシアム協定が無事に更新されたことも合わせてお慶び申し上げます。

先ほどの佐々木学長、あるいはご来賓の各先生方のご挨拶、更には石井副学長からのご報告にありましたとおり、ＪＩＣＡとの協力のもと、この五女子大学コンソーシアムがこれまでの20年間に築いてこられたすばらしい実績と成果と意義は改めて繰り返すまでもございません。実は、本講演の依頼を頂戴しました時に、お引き受けすべきかどうか大変逡巡いたしました。というのも、五女子大学の関係者の皆様がこれまで果たしてこられた役割やご尽力、またアフガニスタンをはじめ様々な政変や紛争の起こっている地域で、今日も支援に携わり、あるいは当該地域と交渉し、具体的な課題解決に向けて取り組んでおられる方々がいることを思う時、私のようなものがこの場でお話しできることがあるだろうか？と考えたからです。一方で、お茶の水女子大学からは、より

図1

アウトライン

1. 紛争地域の教育と重層化する危機

2. 教育におけるジェンダー平等をめぐる問題

3. アフガニスタン女子教育支援の位置づけ
　　ー国際教育協力における五大学コンソーシアムの意味

4. 人間の安全保障と教育の役割

5. 持続可能な未来社会構築に向けた教育
　　ーアジア女子大学の事例

6. 多様化する社会と人間の尊厳・平和を守るための教育

幅広く、アジア、女子教育、紛争時や緊急時の教育や国際協力についての話を、とおっしゃっていただきまして、大変厚かましいとは思いましたけれども、今日この場でお話をさせていただくことにいたしました。

私は、比較教育学、国際教育学を専攻しております。そこで、教育が人間の安全保障、そして平和の構築のためにどのような役割をもっているかということを、管見ではございますが、お話しさせていただきたいと思います。

本日の話のアウトラインとしては、はじめに紛争地域の教育のあり方、そして、教育におけるジェンダー平等をめぐる問題についてお話しさせていただきます。その後、五女子大学コンソーシアムが発足した２００２年頃の日本の国際教育協力の状況の中で、女子教育支援がどのような位置づけであったのかを振り返りまして、人間の安全保障と教育の役割、さらに、持続可能な未来社会構築に向けた教育について、アジア女子大学という一つの事例をもとにお話しします。そして、多様化する社会と人間の尊厳・平和を守るための教育ということを皆様と共有させていただければと思います（図1）。

1　紛争地域の教育と重層化する危機

まず、緊急時、あるいは今日の長期化する様々な危機下における教育の役割についてお話しします（図2）。

教育を受ける権利については様々な国際条約や宣言でも繰り返し述べられて

図2

緊急時および長期化する危機下の教育

教育を受ける権利

✓「世界人権宣言」第 26 条−すべての人が教育を受ける権利を有する
✓「経済的、社会的および文化的権利に関する国際規約（社会権規約）」第 13 条
✓児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）」第 28 条

紛争、自然災害、感染症などによる複合的な危機の懸念

危機の長期化と教育

非日常的な環境の中 での教育の意義

ー紛争や自然・人為災害による物理的・心理的・社会的影響の緩和、保護、支援の提供

長期的なコミュニティの再生を支える

- 学びの継続
- 分断された地域社会の集団間の関係構築

います。しかしながら、危機が長期化し、あるいは紛争以外にも自然災害や感染症など様々な複合的な危機の懸念が多く渦巻く中で、当事者の方たちの物理的・心理的・社会的影響をいかに緩和し、保護し、そして支援するか、ということは簡単なことではありません。

さらに、そうした緊急時だけではなく、コミュニティの再生を支える意味で、どのように教育や学びを継続し、かつ、分断されてしまった地域社会の集団間の様々な関係構築を図っていくかということも大きな課題になっています。

紛争地域の教育が抱える課題をこちらのスライド（図3）にお示ししています。緊急時および長期化する危機下では、いわゆる平和構築のための教育、国際理解教育といったものが行えなくなります。そうした状況の中で、周縁化された人々、たとえば、女子あるいは障害をもつ方々や少数派（少数民族、難民や移民）の教育、さらにその地域の文化的・社会的背景のことも考えなくてはいけないと思います。宗教や様々な文化的な差異によって差別されている社会

図3

「紛争地域の教育」が抱える重層的な課題

平和構築のための教育、国際理解教育、

平和の文化
基本的人権
人間の尊厳
共生
持続可能性

緊急時および長期化する危機下の教育

緊急支援、保護
重層化する危機
長期化する危機
学びの断絶と継続

周縁化された人々の教育

男女間格差
障がいを持つ人々
少数民族の教育
難民・移民の教育
社会階層と教育

図4

教育におけるジェンダー平等をめぐる問題

ジェンダー平等＝ジェンダーに基づく関係性を排除し、社会文化的規範に制約されず、自らの意志で人生の選択を行い、自身の持つ可能性や才能を開花させることを可能である状態。

⇩

こうした状態をどのようにして可能とできるか。

教育における男女間格差とジェンダー平等の視点の導入

世界人権宣言（1948）、教育における差別撤廃条約（1960）、女性差別撤廃条約（1979）で議論

1990年　EFA（Education for All ）世界会議---女子・女性の教育参加が緊急優先分野とされたが、独立した優先分野にはならず、「ジェンダー・ブラインド」の状況が生じる。

2000年　ダカールEFA行動枠組み ----------2005年までに初・中等教育での男女間格差解消と2015年までに教育におけるジェンダー平等の達成（第5目標）
（MDGsのターゲット3にもふくまれる）

階層の人々の教育が、二重にも三重にも厳しい状況におかれることは、皆様もご承知のとおりかと思います。

2　教育におけるジェンダー平等をめぐる問題

こうした中で、「教育におけるジェンダー平等」という問題が、これまでも様々な場で議論されてきました（図4）。「ジェンダー平等」とは、「ジェンダーに基づく関係性を排除し、社会的文化的規範に制約されず、自らの意思で人生の選択を行い、自身の持つ可能性や才能を開花させることが可能である状態」と定義されます。

では、そうした状態をどのようにして可能にしていくか。そこに教育における大事な役割があることは、これまでも様々な場で課題となってきました。

国際教育協力の歴史の中では、世界人権宣言や、あるいは教育における差別撤廃条約、女性差別撤廃条約での議論がありました。そして、１９９０年に「Education For All」（ＥＦＡ）と高らかに謳われた世界会議において、女子・女性の教育参加が緊急優先分野とされ、大きく注目を集めました。しかしながら、この時はまだ独立した優先分野にはならず、「ジェンダー・ブラインド」の状況を生んでしまったことも指摘されています。

一方、それから10年後のダカールで取り決められたＥＦＡ行動枠組みでは、「２００５年までに初・中等教育での男女間格差を解消すること」、そして「２０１５年までに教育におけるジェンダー平等を達成すること」が謳われて

図5

五大学コンソーシアムによるアフガニスタン女子教育支援

2001年11月30日、文部科学省内に岸田副大臣を本部長とする「アフガニスタン復興のための教育支援プロジェクトチーム」設置

2002年
1月21日～22日　アフガニスタン復興支援会議　（共同議長：日本、米、EU、サウディ・アラビア）
4月7日～18日、第２次アフガニスタン支援調査団に初めて教育専門家を派遣
4月16日～19日、アフガニスタン暫定行政機構のアミン教育大臣訪日　遠山大臣との会談
○1教育専門家の派遣、2我が国の女子大学(*)による女性教員研修、3ユネスコを通じた識字教育支援、4文部科学省の協力のもとNGOが実施する「アフガンキッズ教育支援プロジェクト」（学校募金）を提案
○アミン大臣は、遠山大臣から提案のあった支援策は大変有意義であり、実施してほしい旨発言。特に教育計画の策定とアセスメントを補佐する教育専門家の派遣、教員養成学校（教員養成センター）の設置・運営への支援を求めた。加えて、日本とアフガニスタンの子供同士の交流を進めたい、旨発言

5月17日　五大学コンソーシアム発足
5月14日～6月2日　教育専門家を派遣
5月19日～21日　　岸田文部科学副大臣一行アフガニスタンを訪問
○暫定行政機構のカルザイ議長、アミン教育大臣等と会談した他、初等中等教育学校、教員養成校、カブール大学等を視察。
○アミン教育大臣との会談において、岸田副大臣は４月に遠山大臣が提示した支援策につき進捗状況を報告。加えて、カルザイ議長との会談では、高等教育レベルでの協力策として、カブール大学と東京農工大学との大学間協力や、留学生受入等について提示。
○アフガニスタン側からは、教育専門家の派遣に謝意が述べられるとともに、女性教員研修、高等教育などへの支援要請が表明された。

います。これは同じ年に出された「ミレニアム開発目標」（ＭＤＧｓ）ターゲット3にも含まれています。

3　アフガニスタン女子教育支援の位置づけ
国際教育協力における五大学コンソーシアムの意味

実は、ジェンダー平等をめぐる議論をはじめにご紹介したのは、この五女子大学コンソーシアムが発足した２００２年前後は、ちょうどそのような議論が起こり、ＭＤＧｓが走り始めた頃であったということを改めて振り返らせていただきたかったからです。アフガニスタン復興支援から始まった、このコンソーシアムによる教育支援の経緯については、先ほど、石井副学長が当時の写真を交えて詳細にご報告くださいました。

こちら（図５）は少し細かい字で恐縮ですけれども、２００１年に、文部科学省の中に、現在の首相、当時の岸田文雄副大臣が本部長となってアフガニスタンの復興のための教育支援プロジェクトチームができたところから、このコンソーシアムが発足していった頃のことを少し挙げさせていただきました。

こうした流れの中で、アフガニスタンの女子教育支援の取組みが実行されるに至ったわけです。先ほど津田塾大学の髙橋学長から、当時の先生方が思い切って勇気を出して、行動なさったというお話がありましたが、その意義を、ここ

で改めて確認しておきたいと思います。

◆教員・職員・学生…全員で取り組んだ支援活動
箕浦康子先生インタビューより

実は、今日お伺いするにあたり、先程からお名前の挙がっておられる先生方の他にもうお一方、この取組みに尽力された方にインタビューをしてきました。当時、五女子大学コンソーシアムが発足するにあたり、各大学から2名ずつ運営委員が選ばれたそうですが、その取りまとめをされたのが、当時お茶の水女子大学の教授でいらした箕浦康子先生でした。実は、箕浦先生は、私の大学院時代の博士論文の指導教官でもあり、私が今日この場でお話しさせていただくことを、どのように思われたかと考えますと恐縮の至りですが、先生は当時作られた報告書を持ち出して、当時のことを振り返りながら、お話しくださいました。

先ほどの石井副学長のご報告にもありましたけれども、箕浦先生は、まず、当時、コンソーシアムの皆様が、とにかく現地のニーズや状況を踏まえた支援計画を立てようとした、ということを強調されました。当初よりこの支援活動は、当事者だけのものとするのではなくて、五女子大学の先生方、職員、そして附属学校を持っておられる大学では附属学校の先生方や生徒さんも交えて、みんなで考えていこう、そういう活動にしたかったんですよ、というお話をし

てくださいました。

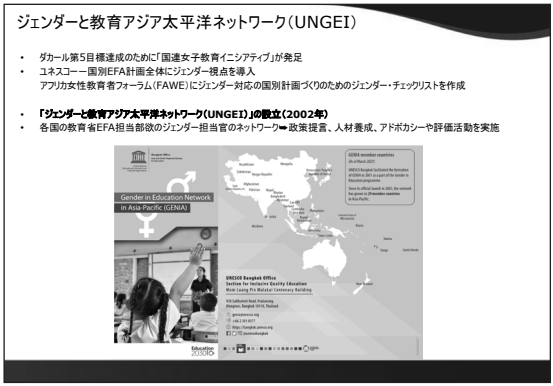
ホームビジット（来日したアフガニスタンの学生さんが日本の家庭を訪問すること）、あるいは、学生さんたちが研修の記録やエスコートなどの補助をインターンとしてなさるなど、本当に幅広い方が関わってこの取組みが進められたことを伺った次第です。

また、実際に支援活動を始めるにあたって、２００２年5月19日から岸田文部科学副大臣（当時）がアフガニスタンを訪問されていますけれども、箕浦先生は副大臣に同行されて現地に赴かれたそうです。その前に派遣されていた、当時、大阪大学におられた教育専門家の内海成治先生が、現地でのサポートにあたられました。箕浦先生ご自身も、実際に現地で学校を視察して、どのようなニーズがあるのかを見聞し、それを踏まえて、お仲間の先生方と共に、アフガニスタンの教育大学、そして学校の校長先生を日本にお呼びする計画を立てられたそうです。

こうした実践上の工夫に加えて、実際にはマネージメントや連携体制、特に五女子大学間の連携体制も大事な課題であったと伺っております。

また、アフガニスタンから第一陣の方が来られた1月～2月は、「日本は入学試験で大変な時期だったけれども、附属学校の先生も協力してみんなで取り組みました」とおっしゃったのを聞いた時、私は、まさにこれこそが現地の声を聞きながら、同時に日本の人々も一緒になって考えながらやっていく国際協

図6



力の一つのあり方、ＪＩＣＡをはじめとする日本の国際協力が培ってきた大きな経験と力であったということも強く感じ、大変感慨深いものがございました。

本日の話には、少しおおげさかもしれませんが、「ここにある未来」と副題をつけさせていただきました。実は、この「未来」には、アフガニスタンの方々の未来だけでなく、そこに関わってこられた方々、あるいは今現在関わっておられる方々の未来も含まれます。そういったことを踏まえて、皆で取り組んでいく国際協力なのだということを強く思い、この副題をつけさせていただきました。

◆コンソーシアム発足時の時代背景

２００２年の前後に起こったことをもう少しだけご紹介します（図６）。

この時期に、国連の活動として「教育アジア太平洋ネットワーク」ができました。アジアの中に連携を作って、ジェンダーについて考えていこうとする取り組みで、これは今日もなお続いています。

それからもう一つ、日本政府は「成長のための基礎教育イニシアティブ」というも

図7

成長のための基礎教育イニシアティブ
（日本政府　BEGIN: Basic Education for Growth Initiative、2002年）

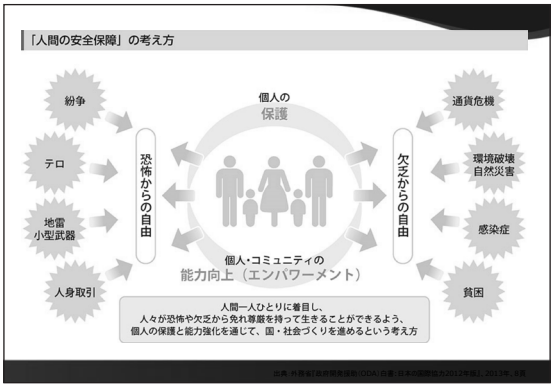
1. 支援に当たっての基本理念
- 途上国政府のコミットメント重視と自助努力支援
- 国際社会との連携・協調（パートナーシップ）に基づく支援
- 他の開発セクターとの連携
- 文化の多様性への認識・相互理解の推進
- 地域社会の参画促進と現地リソースの活用
- 日本の教育経験の活用

2. 重点分野
- 教育の「機会」の確保に対する支援
  - ・多様なニーズに配慮した学校関連施設の建設
  - ・ジェンダー格差の改善のための支援（女子教育）
  - ・ノン・フォーマル教育への支援（識字教育の推進）
  - ・情報通信技術（ICT）の積極的活用
- 教育の「質」向上への支援
  - ・理数科教育支援
  - ・教員養成・訓練に対する支援
  - ・学校の管理・運営能力の向上支援
- 教育の「マネージメント」の改善
  - ・教育政策及び教育計画策定への支援の強化
  - ・教育行政システム改善への支援

3. 日本の取り組み　（1）現職教員の活用と国内体制の強化（「拠点システム」の構築）
（2）国際機関等との広範囲な連携の推進
（3）紛争終結後の国造りにおける教育への支援

出典：外務省（2002年）https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/af_edu/gaiyo.html

図8



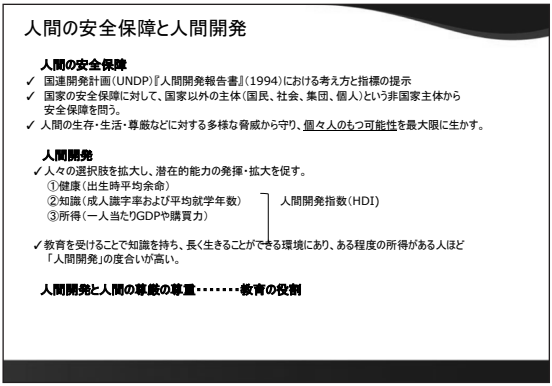
のを、やはり２００２年に出しています（図７）。この中に支援にあっての基本理念や重点目標として盛り込まれている「文化の多様性への認識・相互理解の推進」「日本の教育経験の活用」、「ジェンダー格差の改善のための支援」「教育の「マネージメント」の改善」「理数科教育支援」「教員養成・訓練に対する支援」「学校の管理・運営能力の向上支援」「紛争終結後の国造りにおける教育への支援」などは、まさに時を同じくして、五女子大学コンソーシアムがアフガニスタン女子教育支援を通じて現場のニーズをふまえながら実践なさったことであったと感じます。

４　人間の安全保障と教育の役割

こうした動きの中で、今日私が触れさせていただきたいことの一つが、「人間の安全保障」という考え方です。

こちらの図（図８）は、外務省がＯＤＡ（政府開発援助）報告の中に載せているものです。「人間の安全保障」とは、人間一人ひとりに着目し、「人々が恐怖や欠乏から免れ尊厳を持って生きることができるよう、個人の保護と能力強化を通じて、国・社会づくりを進める」という考え方です。それはいわゆる国を主体とした安全保障とは少し違って、人々の「欠乏からの自由」あるいは「恐怖からの自由」を、個人の保護や人・コミュニティのエンパワーメント（能力向上）を通じて培っていこうとするもので、２０００年前後から、いろいろな

図9



ところで議論されてきました。

たとえば、「国連開発計画（ＵＮＤＰ）」が毎年出す「人間開発報告書」には、いち早く１９９４年に「人間の安全保障」に共通する考え方と指標が盛り込まれました（図９）。そこでは「人間開発指数」、すなわち人々が、安心・安全な暮らしを維持するための健康、知識、所得をきちんと培っているかどうかをみる指標が提示され、人間開発と人間の尊厳が尊重される、そういう教育の役割が改めて問い直されたわけです。

実は、この「人間の安全保障」の考え方はその後もずっと続いていて、今行われている「持続可能な開発目標」（ＳＤＧｓ）の中心概念の一つと言えるのではないかと思います。

◆人間の安全保障を脅かすものにいかに立ち向かうか

グテーレス国連事務総長の講演より

アントニオ・グテーレス国連事務総長が２０１７年に来日された際、私が現在勤めております上智大学で講演してくださいました（図10）。この時のご講演は学生に向けたものでしたけれども、事務総長が選ばれたテーマがまさに「人間の安全保障」で、それを脅かすものとして、五つの課題、すなわち核兵器の脅威、複雑化する軍事紛争や内戦、地球温暖化による気候変動の脅威、グローバル化と格差の拡大、移民や難民による国家間の緊張のたかまりを示されまし

図10

人間の安全保障を脅かすものと、それに対する対応
ーアントニオ・グテーレス国連事務総長による講演より　（2017年12月　於上智大学）

- 核兵器の脅威
- 複雑化する軍事紛争や内戦
- 地球温暖化による気候変動脅威
- グローバル化と格差の拡大
- 移民や難民による国家間の緊張のたかまり

↑

- 脆弱な紛争被災コミュニティにおける平和と持続可能な開発への移行（紛争予防と平和構築）
- 人身取引の被害者、および、その保護と能力強化
- 気候変動関連の脅威の多次元的な影響（自然災害、人為的災害）への対応
- 都市部での暴力と、その健康、教育、経済、個人およびコミュニティの安全保障への影響
- 貧困の削減、社会的包摂および孤立したエリアでのコミュニティ密着型の開発
- 健康関連の情勢不安の経済的、環境的および社会的要素

た。

ここで繰り返すまでもなく、これらのことは今日の本当に大きな脅威になっており、コロナ禍、ウクライナ危機をはじめ世界の様々な地域で起こっている紛争、あるいは気候変動により、さらに深刻化しています。こうした問題に、いかに人類が連帯し協力して取り組んでいけるか、そこがとても大事なのだと、グテーレス事務総長は、学生たちに向けて語りかけてくださいました。それを伺った時に、改めて私たちにとっての「人間の安全保障」を考えていくべきだと思った次第です。

「人間の安全保障」については、ＵＮＤＰが、最新の報告書（２０２１～２０２２年版）の中でも、「不確実な時代の不安定な暮らし：激動の世界で未来を形づくる」というテーマが取り上げています（図11）。

これまでにない厳しい状況の中で、先ほどご紹介した人間開発指数の世界平均が２年連続して低下しました。こんなことは今まで一度もなかったそうで、２年の間に低下した国が約９割にのぼりました。その背

図11

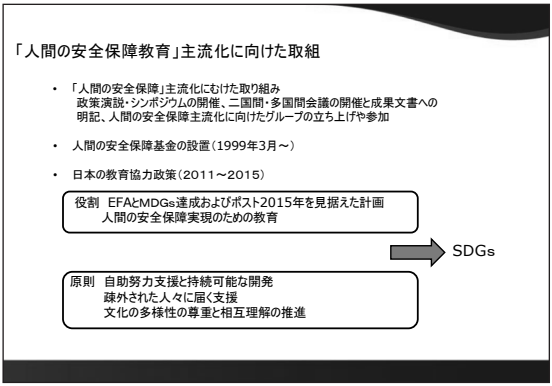
「人間の安全保障」が今日的に問うもの

- 『人間開発報告書 2021-2022年版』
  「不確実な時代の不安定な暮らし：激動の世界で未来を形づくる」
  (Uncertain Times, Unsettled Lives: Shaping our Future in a Transforming World)

  不確実性の重なり合い
  社会と経済の大転換や地球規模の危険な変化、
  分極化の大幅な拡大
  ↓
  人間開発指数（HDI）の指数が世界平均で2年連続して
  低下した国が全体の9割

- 『UNDP人間の安全保障特別報告書』（2022年2月）
  「人新世の時代における人間の安全保障への新たな脅威：
  より大きな連帯を求めて」
  (New threats to human security in the Anthropocene: Demanding greater solidarity)

図12



景として、不確実性が重なり合い、社会と経済の大転換が起こり、地球規模の危険な変化や分極化の大幅な拡大が進んだことが指摘されています。

ＵＮＤＰは、今年の２月に特別報告書も出し、「人新世の時代における人間の安全保障への新たな脅威」へのアプローチとして、「より大きな連帯を」と呼びかけています。

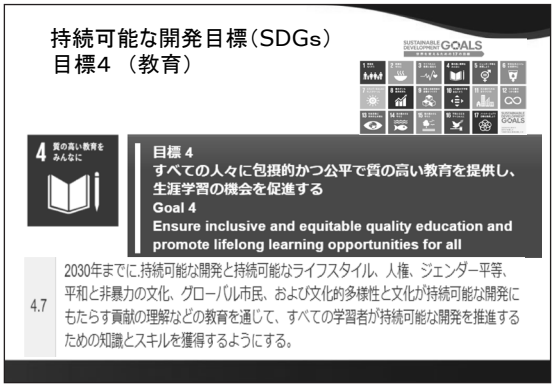
こうした動きがある中で、では今、教育の分野で何をどう考え、実践していくか、これは私たち皆が共有し、考えていくべきテーマであると思います。

5　持続可能な未来社会構築に向けた教育
―アジア女子大学の事例

少し話が戻りますが、先ほどお話しした五女子大学コンソーシアムが発足した２００２年以降、日本の国際教育協力政策も様々な進展を遂げ、特にＭＤＧｓの目標年であった２０１５年以降は、今のＳＤＧｓへと続く大きな流れができてきました（図12）。そこでの原則は「自助努力支援と持続可能な開発」「疎外された人々に届く支援」「文化の多様性の尊重と相互理解の推進」であり、ここにも「人間の安全保障」の特徴が色濃く表れています。

先ほどの石井副学長のご報告でもＳＤＧｓに触れられていましたけれども、その17の目標の４に教育が取り上げられていて、特にターゲット4.7には、「人

図13



間の安全保障」を具体的に示した大きなテーマがいくつも挙げられています（図13）。

持続可能なライフスタイル、人権、ジェンダー平等、平和と非暴力の文化、グローバル市民、文化的多様性と文化が持続可能な開発にもたらす貢献の理解、こういった教育をいかに後継し、学習者が持続可能な学びを継続できるか。包摂的かつ公平で、しかも質の高い教育をいかに維持していくか。短くまとめられている目標ですが、私はこのわずかな言葉の中に、多くの希望とこれからの教育の責任が詰まっているように、感じております。

これからの国際教育協力について思う時、コロナ危機で特に対応が求められるようになった多くの困難な課題があります（図14）。途上国を中心とした開発目標であったＭＤＧｓとは異なり、ＳＤＧｓはすべての国に共有されるべき目標であると言われています。このたびのコロナ禍に際して、まさに私たちの日々の暮らしが、ＳＤＧｓの目標に挙げられている課題に対して対応を迫られていると思います。

図14

これからの国際教育協力

1. コロナ危機への対応
   世界の教育格差の更なる拡大と対応
   学校閉鎖下での対応
   安心安全な教育環境
   教育の質の確保
   包摂性と多様性、そこでの公正性

2. 国際協調・国境を越える協力

3. 人間の安全保障実現・人間開発のための教育

図15

平和構築と教育
ー平和構築実現のための教育が持つ力への期待と希望

戦争や紛争そのものの現実を知る・伝える学び
平和そのものを考える学び
平和の実現に向けて何をどう考えるかという学び
「平和」という文化についての学び
平和を考える態度や考え方を育てる学び
　批判的思考や創造性を育てる学び
　多様性の尊重
　一人一人を大切にする創造的な学び
　いじめのない、教育における平和な環境

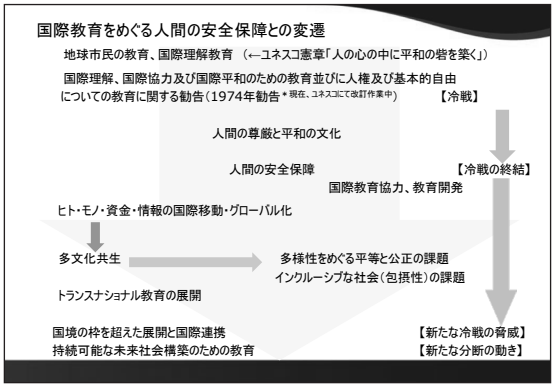
こうした中で、では私たちに何ができるか？と考えていくとき、私は国際協調、そして国境を超える協力ということを挙げたいと思います。これは、人間の安全保障の実現、あるいは人間開発のための教育ともつながると思うからです。

◆平和構築を実現するために教育が持つ力

「平和教育」というが言葉が学校現場で使われることがあります（図15）。平和を教えること、戦争や紛争の悲惨さを伝えることも、もちろん平和教育の大事な役割です。しかし、実はそもそも「平和」とは何かと考えたり、「平和」という文化について学んだり、あるいは平和を考えていく時の態度や考え方を育てることも全て含めて、平和教育やＳＤＧｓのゴール４は目指されていくべきだろうと思います。そこでは批判的思考や創造性を育てる学び、多様性の尊重、一人ひとりを大切にする創造的な学び、あるいはいじめのない、教育における平和な環境といったことが求められます。これらの点をどのように考え、実践していくかが、教育の現場の大きな責務と役割であると考えます。

この図（図16）は、私が第二次世界大戦以降の国際教育の変遷を人間の安全保障の観点をからめながら整理してみたものです。実は、今お話ししたような課題は今に始まったことではありません。第二次世界大戦後も、二度と戦争の惨禍を繰り返さないという思いから１９４６年に、ＵＮＥＳＣＯ（ユネスコ）

図16



が設立されました。「ユネスコ憲章」の前文では、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と宣言され、地球市民の教育や国際理解教育ということが、これまでも国際社会で繰り返し議論されてきました。

1974年には「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」という、とても長いタイトルの、しかしながら大変重要な勧告が出されています。

実は、現在ユネスコがこの改訂作業に取り掛かっています。大変僭越ながら、実は私もこの改訂作業に国際グループのメンバーの一人として少し関わらせていただき、このたびの改訂において重視すべき点を、各国の方々と話し合いました。今、社会あるいは世界に求められている教育や文化、科学の役割について、国を超えて話し合う中で、最終的に立ち戻ってきたのが、人間の尊厳と平和の文化、そして人間の安全保障のことでした。

先の74年勧告は、当時の冷戦の構造を背景に出されたものでした。この勧告がユネスコ総会で採択された時には、50年後にまさか新たな冷戦が生まれるような危機的状況下でその改訂作業が行われることになろうとは、誰も予想していなかったと思います。そうしたことを含めて、今新たな分断の動きがある中で、国境の枠を超えて持続可能な未来社会の構築のためにどのような教育ができるかということを、私たちは考えるべきだろうと思います。

図17

ジェンダー平等からみた国際教育開発と課題

1. 家庭、学校、労働市場、政治など社会全体の仕組みや価値規範との関連なしに、ジェンダー平等を達成することは難しい。
2. 貧困、人種/民族、カーストなど他の要因と密接に関連しており、社会的文脈のなかで、不平等要因や因果関係を含めて検討することが必要
3. ジェンダー不平等の形態や過程、結果が、就学率や識字率の数値上は男女間格差が縮小しているという傾向により複雑でわかりにくくなっている。
4. ジェンダーと国際教育開発に関連する国境を越えたネットワークや試みが持つ可能性
5. 教育の社会的機能を批判的にとらえる視角をもつことが重要。

【出典】菅野琴、西村幹子、長岡智寿子「『ジェンダーと国際教育開発』再考」菅野琴、西村幹子、長岡千鶴子編『ジェンダーとこ徳再教育開発』福村出版、2012年、235-238頁

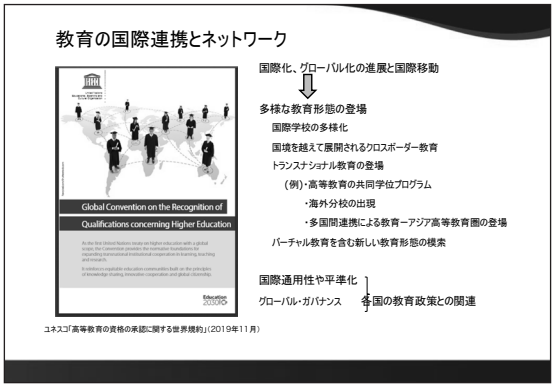
◆ジェンダー平等を社会的・文化的文脈の中で考える

その際に、一つの大きなテーマになるのがジェンダー平等であり、五女子大学コンソーシアムの活動とも繋がっていると考えます。

こちら（図17）には、この観点からみた国際教育協力のあり方とその課題をまとめてあります。ジェンダー平等を数値的に、あるいは状況が表面的に解決されればよしとするのではなく、社会的、文化的な文脈の中で考えていくことが必要であることが、専門家の先生方によって指摘されています。さらに、教育の社会的機能を批判的、多角的に捉えながら、いかにして国境を超えたネットワークを築いていくかということも議論されています。

現在、高等教育では、国際化の大きな流れがあります。これは、時として競争や対立を生む一方で、一つの大きな希望でもあります。今日では、国際社会において「教育の変革」ということが言われますけれども、国境を超えて次の世代、あるいは今生きている私たちも含めて、みんなで協力して教育のあり方を考える動きがでています。ここにはもちろん国際通用性や平準化やグローバル・ガバナンスといった、乗り越えなくてはいけない各国間の政策上の違いもあります。しかしながらこのトランスナショナルな動きがいろいろな可能性を生んでいく点が、特に大学や高等教育機関の大きな役割ではないかと思っております（図18）。

図18



ユネスコ「高等教育の資格の承認に関する世界規約」（2019年11月）

◆アジア女子大学のグローバルな人材育成の取り組み

ここで最後にご紹介したいのが、アジア女子大学の事例です（図19）。アジア女子大学は、奇しくも２００２年に構想が話し合われ、バングラデシュが土地を提供するような形でチッタゴンに設立されました。特定の国が主導するのではなくて、国際社会の支援と協力によって創設された大学です。

アジア地域に貢献できる女性リーダーを育てるということが大きな目標になっており、この大学でも、やはりアフガニスタンの支援プロジェクトが行われています。

アジア女子大学は、学部・修士課程だけではなく、学部に入る前の準備教育として英語を履修できる課程等も備えています。そして、個別の国の人材育成ではなく、アジアを中心とした国際社会で活躍する女性の人材育成を目指して、「国の枠を超えて議論をしていこう」、そんな試みが行われています。

国家の枠組みの中で性別役割分業が固定

図19

アジア女子大学（Asian University for Women, AUW）の沿革

- 2002年、アジア女子大学支援財団設立
- 2005年バングラデシュの議会が「アジア女子大学憲章」を承認。
- 2008年に開学　バングラデシュのチッタゴンに設立　（土地はバングラデシュ財団
- 特定の国が主導するのではなく、国際社会の支援と協力によって創設。

ASIAN UNIVERSITY FOR WOMEN

（目標）

①役立つ専門的知識と技能をもち、指導的役割を果たすことのできる人物、サービス精神と共にアジア地域の発展に貢献できる人物の育成。

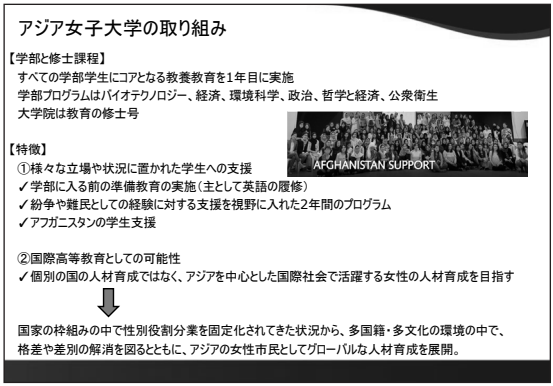
②南アジア、東南アジア、南西アジア地域の様々な文化と宗教的背景をもった女性を対象に、活気ある多様な環境で知識と人格を育成する。

③学生中心の学術環境のもと、研究の即しと、一般教養科目と専門科目を提供し、現実問題と論理を関連付けて理解できるようにするとともに、アジアおよび世界の問題解決に貢献できるようにする。

④異なる文化、人格、背景を尊重し、複雑な問題に対して協力して解決方法を模索するリーダーシップ能力、及びサービス精神の育成を目指す。

⑤想像力豊かで高度な技術を持った専門家、経済発展を目指す女性リーダーを育てる。

図20



化されてきた状況から、多国籍・多文化の中で格差や差別の解消を図ると共に、アジアの女性市民としてグローバルな人材育成を展開している大変興味深い事例です（図20）。

6　多様化する社会と人間の尊厳・平和を守るための教育

こうした動きを見る時に、私は教育を学んできた者として、教育の役割と課題を改めて確認したいと感じます（図21）。

すなわち、社会的に不遇な立場におかれたマイノリティの人々に教育の機会を保障するための教育、そして人々のエンパワーメントをどのように進めるかということです。多様性が尊重される一方で、誰一人取り残すことのない包摂性も求められる場合、多文化共生を目指す過程ではしばしばジレンマが生じてしまいます。そこには、単に教育の機会を平等に与えればいいのではなく、本当に必要とされている教育内容が人々に届くのかという公正性を巡る問題もあります。

人間の尊厳を守り、人間の安全保障をどのように維持・発展させるか。これはガルトゥングという方が述べられた、「消極的な平和」、すなわち紛争のない状況だけではなく、皆が安心・安全に暮らしていける「積極的な平和」を目指すうえでも非常に重要な課題だと思います。

今年9月の国連総会では国連教育変革サミットが開催されました。事務総長

図21

教育の役割と課題
ー多様化する社会と人間の尊厳・平和を守るための教育

- 社会的に不遇な立場におかれたマイノリティに教育機会を保障するための教育
- 人々のエンパワーメントをどのように進めるか

- 多文化共生社会のジレンマ：平等と公正をめぐる問題
  ー多様性をどこまで尊重するか
  ー人間の尊厳を守り、人間の安全保障どのように保持・発展させるか。
  ー「消極的平和」から「積極的平和」へ（J.ガルトゥング）を目指すうえでの重要な課題

【国連教育変革サミット（2022年9月）における5つの主要分野】
①包摂的・公正・安全で健康的な学校
②ライフワークのための学習とスキル
③教員、教育活動、教育職
④デジタル革命とデジタルトランスフォーメーション
⑤教育資金調達

自らが音頭を取って教育をテーマとするサミットが開かれたこと自体が、画期的な出来事だったと関係者から伺っております。

そこでは、包摂性、教員の活動、学習とライフスキル、そして今日大きなテーマになっているデジタルトランスフォーメーション、さらに教育財政の５つの主要分野について議論されました。

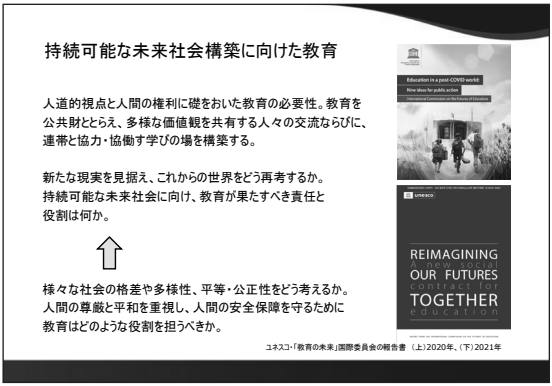
持続可能な未来を私たちはどのように築いていくのか。それはとても険しい道であり、この五女子大学コンソーシアムが歩んでこられた20年の間にもあった様々なご苦労や思いが交錯することもあると思います。

しかしながら教育を国際的な公共財ととらえ、多様な価値観を共有する人々の交流を促進し、そして連帯と協力、協働を促す学びの場を、歩みを止めることなく構築していくことが、やはりとても大事だと思います。そして、そのことこそが、持続可能な未来社会に向けて教育が果たすべき役割になっていくのではないかと思います。

こちら（図22）にお示しているのはユネスコの「教育の未来」国際委員会が、コロナ禍が始まって間もない２０２０年に出した緊急レポートと、２０５０年までを視野に入れ、私たちの新しい未来を共に考えていこうという２０２１年11月に出されたレポートです。

まさに、本日の講演の副題にさせていただいた「ここにある未来」です。私も是非その仲間に入れていただいて、皆様と一緒に今後もいろいろなことを考

図22



えていきたいと思います。

本日、この後、青木先生からアフガニスタンの詳しい状況についてのお話があり、さらにその後は、学生さんたちからの素晴らしい活動のご発表があると伺っております。学生さんたちの未来も含めて皆が共に歩んでいける、そんな国際教育協力でありたい。そこに皆で参加していくということを、今日ここで共に考えることができればと思います。

最後になりますが、本日は貴重な機会を頂戴いたしまして、あらためまして心からお礼申し上げます。拙い発表ではございましたが、これで私の話を終えさせていただきます。

どうもご清聴ありがとうございました。

講演

『アフガニスタンにおける統治の困難さ』

青木健太 氏　公益財団法人中東調査会研究員

公益財団法人中東調査会研究員。２００１年上智大学卒業、２００５年英ブラッドフォード大学平和学修士課程修了（平和学修士）。専門は現代アフガニスタン・イラン政治。アフガニスタン政府省庁アドバイザー、在アフガニスタン日本国大使館二等書記官、外務省国際情報統括官組織専門分析員、お茶の水女子大学講師等を経て現職。著作に、『タリバン台頭――混迷のアフガニスタン現代史』（岩波書店、２０２２年）、他。

皆様こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました中東調査会研究員の青木健太でございます。私は、現代アフガニスタン政治を専門にしておりまして、２００５年から２０１３年の約7年間、首都カーブルにてアフガニスタン政府省庁のアドバイザー、また在アフガニスタン日本国大使館の書記官などとして勤務しておりました。

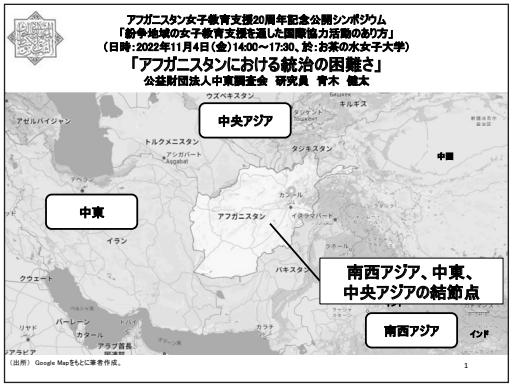
その後、２０１５年から２０１９年までお茶の水女子大学で約5年間教員をして、２０１９年から現在の所属先におります。

佐々木学長、ご列席の皆様、このたびは五女子大学コンソーシアムにおけるアフガニスタン女子教育支援20周年、誠におめでとうございます。このような栄えある記念公開シンポジウムにお招きいただきまして光栄に存じますとともに、大変喜ばしく思います。

はじめに一言だけ述べさせていただきます。今年（２０２２年）10月、アフガニスタン研究で偉大な足跡を残された、和光大学名誉教授の前田耕作先生が逝去されました。また、今年4月、お茶の水女子大学グローバル協力センターにてアフガニスタン女子教育支援に尽力された元同僚の上中佐江子アカデミックアシスタントが逝去されました。この場を借りまして、故人のご功績をしのび、謹んで哀悼の意を表したいと思います。

さて、私からは、「アフガニスタンにおける統治の困難さ」と題しまして、歴史、民族、宗教などの観点を踏まえたうえで、アフガニスタンの現状と直面する課

図1



題、そしてアフガニスタンの教育を取り巻く状況についてお話しし、最後に今後の展望を述べたいと思います。

1　アフガニスタンとはどのような国なのか
―なぜ統治が困難なのか

まずお話を進める前に、アフガニスタンとはいったいどのような国なのか、簡単に説明をさせていただきます。

◆地政学的条件（図1）

アフガニスタンは、南西アジア、中東、中央アジアの結節点に位置し、人口およそ3000万から4000万人、日本の1.7倍に相当する約65万平方キロメートルの国土を有する、6か国に囲まれた内陸国です。北はトルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、東は中国、パキスタン、西はイランに面しています。

この地理的条件、あるいは地政学的条件というものがアフガニスタンの命運を決してきたと言っても過言ではありません。

すなわち南西アジア、中東、中央アジアを結ぶ征服の道であるがゆえに、様々な文明が同地を訪れ、あるものは通り過ぎ、またあるものは現在まで根付いて

図2

歴史的展開

図表　アフガニスタンの通史略年表

年月	出来事
BC550～330年	アケメネス朝ペルシア（ゾロアスター教）
BC330年頃	アレクサンダー大王東方遠征
3C～5C頃	バーミヤンの大仏建立（仏教の伝来）
7C～8C頃	アラブの支配とイスラーム化
10C～12C頃	ガズナ朝
12C～13C頃	ゴール朝
13C	チンギス・ハーンの大遠征
1747年	ドゥッラーニー王朝樹立
19C～20C初頭	英領インドとロシア帝国によるグレート・ゲーム
1919年	独立
1926～1973年	王制時代

（出所）筆者作成

きました。

◆歴史（図2）

その輝かしい側面を述べますと、紀元前6世紀に勃興したアケメネス朝ペルシアでは拝火教とも呼ばれるゾロアスター教が信仰されており、同王朝は栄華を誇りました。

その後3世紀から5世紀頃、バーミヤンの仏教遺跡に代表されるような仏教文化が栄え、優れた文化や芸術をこの地で揺籃しました。そして、およそ7世紀から8世紀頃、イスラームがこの地に到達しました。

その一方で荒々しい側面に触れますと、紀元前4世紀頃にはアレクサンダー大王が東方遠征でこの地を訪れ、13世紀にはチンギス・ハーンがこの地を襲いました。

時代がだいぶ下り、19世紀から20世紀初頭にかけての帝国主義の時代においては、英領インドと帝政ロシアの角逐の舞台となりました。いわゆる「グレート・ゲーム」と呼ばれる時代です。

さらに時代が下り、冷戦期にはアフガニスタンはソ連軍の侵攻を受けました。その結果、東側の拡張に対して警戒を強める西側諸国が対ソ連抵抗戦線に武器や資金を供与し、この地は代理戦争の舞台と化しました。

そして21世紀に入りますと、アメリカが始めた「テロとの戦い」の最前線と

図3

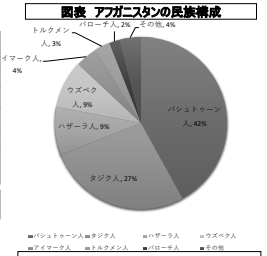
国の概要

【概要】

面積	65万2864平方キロメートル（日本の約1.7倍）
人口	3289万人（2021年4月推計）
首都	カーブル
言語	ダリー語、パシュトゥー語、他
宗教	イスラーム教
民族	パシュトゥーン人、タジク人、ウズベク人、ハザーラ人、他

（出所）公開情報を元に筆者作成。なお、アフガニスタンでは国勢調査が行われたことがなく、人口や民族分布について異なる統計がある点に留意が要る。

図表　アフガニスタンの民族構成



（出所）Brookings institute Afghanistan Index
https://www.brookings.edu/afghanistan-index/ を元に筆者作成。

して位置づけられることとなります。

つまり、その地政学的条件からアフガニスタンは、常に諸外国による介入と干渉に翻弄されてきたのです。そのため、為政者にとっては、政治的独立が最大の課題であり続けました。

１７４７年、現在のアフガニスタンの原型であるドゥッラーニー王朝が成立しましたが、それ以降も現在まで、この本質は変わることはなかったと考えております。

◆多民族国家・部族社会（図3）

アフガニスタンは多民族国家であり、異なる民族同士の融和と団結は常に悩みの種であり続けました。最大民族はアーリア系のパシュトゥーン人で、他にもイラン系のタジク人、チンギス・ハーンの末裔と言われるハザーラ人、テュルク系のウズベク人、勇猛で知られるトルクメン人など様々な民族がモザイク状に暮らしています。

昨年8月に崩壊したアフガニスタン・イスラーム共和国の憲法には14の民族名が記されていました。つまりその全てが等しくアフガニスタン人であるということです。

また、アフガニスタンは多民族国家であると共に部族社会でもあります。今述べたような各民族の中に異なる部族が複数存在しており、その部族がさらに

細かく氏族に分かれています。

このようなアフガニスタンでは、外部からの侵略に対して強く警戒する一方で、客人は手厚く歓待する独自の部族文化が育まれてきました。

アフガニスタンの伝統と文化といったものは、イスラームの教えとともに、今、国を実効支配しているターリバーンの行動様式にも強く影響を及ぼしております。

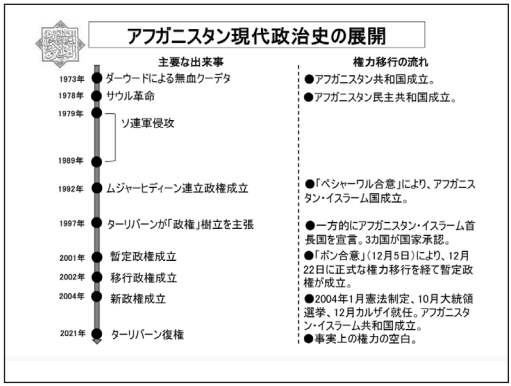
さて、ご列席の皆様、本日の演題は「アフガニスタンにおける統治の困難さ」であります。どのような点が困難であるのかを知るために、一つ個人的なエピソードを述べさせていただきたいと思います。

今年8月下旬、4年ぶりにアフガニスタンの隣国イランの首都テヘランを訪れました。そこで、さるアフガニスタン人女性は、私の移住を決めた直接的な原因についての質問に対して、次のように述べました。以下はダリー語でのやり取りを日本語にしたものです。

「ターリバーンがやってきた後、経済状況の悪化に伴う失業、治安の悪化、子どもの教育事情などを考慮してイランに逃れてきました。ターリバーンによる統治が続くことをアフガニスタン人は望みません。女性は特に厳しい立場におかれています。ターリバーンには国を治める能力も、それに見合う教育水準もありません」

しかし、同時にその人物は、私の将来の望ましい和平についての質問に対し

図4



て、このようにも述べました。「タジク人のアフマド・マスードなど一部の勢力が武装抵抗をしているけれども成功しないでしょう。（たとえ武装抵抗が成功したとしても）結局、彼らがタジク人だけを優遇することは目に見えています。アフガニスタンでは自民族・部族のことしか考えない悪習があります。それはパシュトゥーン人であるカルザイ元大統領の時代もそうであり、自分がいた省庁でも大臣の民族ばかりが職員に登用されていました。これまでもそうだったのですから、今後も変わらないでしょう。人々は腐敗していた旧政権もターリバーンも、どちらも支持しません」

これは一個人の見解に過ぎないかもしれませんが、率直な意見だと、私は思いました。

冒頭で述べたように、アフガニスタンが諸外国の介入と干渉に翻弄されてきたことは事実であり、そのことがアフガニスタンの統治を著しく困難なものとしてきました。これは統治の困難さの「外的側面」と言うべきもので、さらに、アフガニスタン人同士が平和を築く上での障害となっている「内的側面」の存在も指摘しなければなりません。

◆現代政治史の展開（図4）

1933年から1973年まで、アフガニスタンはザーヒル・シャー国王の治世下で立憲君主制に基づき、貧しいながらも安定した統治がなされていまし

た。異なる民族や部族間の対立が存在していたことは事実でしたが、それを超越する国王の存在が、少なくとも表立った衝突を抑え込んでおりました。

しかし、１９７３年、ザーヒル・シャー国王のいとこであるダーウードによる無血クーデタが発生し、アフガニスタン共和国が建国されました。そのダーウードの治世も長くは続かず、１９７８年には共産主義革命、いわゆるサウル革命が勃発し、ダーウードとその一族は処刑されることとなり、新しくアフガニスタン民主共和国が成立しました。

翌１９７９年には、ソ連軍がアフガニスタンに侵攻し、泥沼の戦争が始まりました。この戦争は10年間続き、ソ連軍による侵略に対して、イスラームに基づき国の独立を守ろうとする「ムジャーヒディーン」と呼ばれる勢力、俗に言う聖戦士が武装抵抗しました。西側諸国がこのムジャーヒディーンを支援しました。そして、１９８９年、ソ連軍は撤退に追い込まれることとなりました。

その結果、ソ連軍の後ろ盾により成立していた、言わば傀儡政権であった共産政権は、ソ連の崩壊とともに倒れました。そして、国をソ連から守ったムジャーヒディーン勢力は、１９９２年に連立政権を樹立し、アフガニスタン・イスラーム国を建国しました。国民はこの時、平和の訪れを期待しましたけれども、残念ながら今度はムジャーヒディーンの各軍閥が権力闘争を始めてしまい、国内は混乱に陥ることとなりました。この当時は、警察もまったく機能せず、暴行、略奪、殺人が横行する、暴力が吹き荒れる暗黒の時代となりました。

その後の歴史的展開は皆様ご存じのことと思いますけれども、１９９４年の秋頃に、南部カンダハール州からターリバーンがイスラーム統治に基づく世直しを掲げて台頭し、１９９６年には首都カーブルを陥落させました。「ターリバーン」とは、現地語で神学生を意味する「ターリブ」を複数形にした言葉です。

１９９７年、ターリバーンはアフガニスタン・イスラーム首長国を一方的に宣言しました。この「政権」を承認したのは、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、パキスタンの３か国のみでした。

２００１年の９・11事件を経て、アメリカ軍の介入でターリバーン「政権」が崩壊し、カルザイ大統領を首班とするアフガニスタン・イスラーム共和国が成立しました。

その後の歩みにつきましては、これまでに諸先生方が触れられたとおりです。すなわち、先ほど言いました「内的側面」とは、アフガニスタン社会内部での激しい権力闘争のことであります。１９７３年から２０２１年８月のカーブル陥落までに、アフガニスタンの政治体制は少なくとも６回大きく変更しております。そして、昨年崩壊した旧政権の中心を成していたのも内戦時代に権力争いをしていた諸勢力でありました。

ご臨席の皆様、歴史的事象を理解するためにはコンテクスト、文脈を理解することが不可欠であります。アフガニスタンをはじめとする紛争地域の女子教

図5

育支援をするにあたっては、その対象となる社会の実像を正確にとらえることが必要であり、そのためには歴史的経緯と社会・文化的背景を理解することが重要です。アフガニスタンの現在は、このような50年にも及ぼうかという戦乱の現代史の延長線上にあります。旧政権も、またターリバーンも、このように混迷するアフガニスタン現代史の産物であるということを忘れてはなりません。

◆保守的な風土

アフガニスタンにおける統治の困難さを語るうえでは、同国の保守的な土壌についても触れる必要があります。一例をあげたいと思います。

こちらのスライド（図5）に登場する人物は、アフガニスタンの独立を成し遂げたアマーヌッラー国王と、その妻ソラヤ王妃です。1919年にイギリスから独立を果たしたアマーヌッラー国王は欧米諸国に倣い、アフガニスタン社会を世俗化と近代化の方向に向かわせる改革プログラムに着手しました。

その過程で初めて成文化された憲法が立案され、女性の権利の拡充、女子教育の推進が見られました。また、国王は、男性に対しては髭を剃り、女性に対しては、アフガニスタン社会で身にまとうことを義務付けられているヒジャーブ（頭髪や肌を覆うベール）を取るように指示を出しました。実際、ソラヤ王妃はヒジャーブを取り、西洋風の衣装で公の場に姿を現しました。

図6

しかし、アフガニスタンの社会というのは非常に保守的です。客人に対してすら女性の家族構成員を見せない、そのようなアフガニスタン社会では、こうした急速な近代化への取り組みは、衝撃を持って受け止められました。国王の政策はイスラームの教えに反するとして、宗教界、部族、長老などの猛反発を買い、国王は１９２９年に失脚し、結局そのまま復権できず、客死することとなります。

アフガニスタンの現状と課題を理解する上では、このようなアフガニスタンの地政学的特徴、多民族国家であり部族社会であるといった社会的な背景、諸外国による介入と干渉に代表されるような「外的側面」、そして、アフガニスタンにおいて長期化する戦争の後遺症、同国の保守性などの「内的側面」を幅広く加味しなければならないと、私は考えます。

2　現在のアフガニスタンが直面する「三つの課題」

さて、私に与えられた役割の一つは、アフガニスタンの現状について説明することだと思います。

現在のアフガニスタンは三つの大きな課題に直面しております（図6）。

一つ目は、ターリバーンが実効支配する現在、最大民族パシュトゥーン人を主体とする「ターリバーンによる権力の独占」とも呼ばれる状況が、日本を含めた諸外国の反発を招いております。タジク人、ハザーラ人、ウズベク人など

の他民族への迫害や強制移住、強制結婚などの人権侵害が多数報告されております。

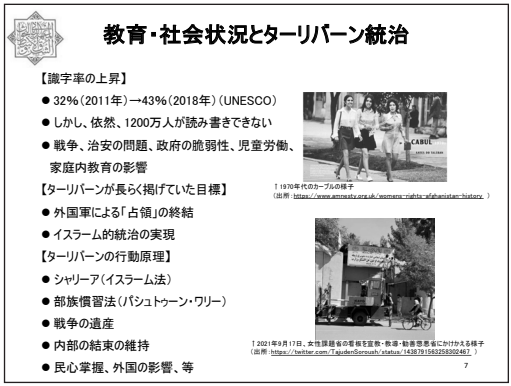
二つ目は「女子中等教育の制限」で、これは深刻な問題であります。ターリバーンは当初、女子教育を再開させると公約していましたけれども、今年3月、その判断を撤回し、日本で言う中学1年生から高校3年生までの女子が登校できない事態となりました。この制限は現在も続いております。（筆者注：その後の２０２２年12月、ターリバーンは更なる通知があるまで女子大学生は公私立の大学において教育を受けられないと通達した。）

そして三つ目として「国際テロ組織との関係の継続」が挙げられます。今年7月31日には、カーブルにいた国際テロ組織アル＝カーイダのザワーヒリー指導者が、アメリカの無人機によって殺害されました。ターリバーンは、掲げている公約とは裏腹に国際テロ組織との関係を継続している、このような疑念が深まっております。

現在のアフガニスタンはこうした多くの課題を抱えており、さらに失業、通貨下落、物価高騰などの経済的困窮もあいまって深刻な危機的状況にあると言わざるを得ません。

ターリバーンが出現した当時の背景が理解できたとしても、理解することが、その主張や考えを一方的に追認することと同義ではないという点に留意が必要です。90年代にもターリバーンは女子の教育の制限、女性の就労の制限、イス

図7



ラーム刑法で量刑が固定された身体刑であるハッド刑の適用、またバーミヤンの仏像破壊などを行い、国民の反発を買うとともに国際的な孤立を深めました。

◆彼らも「教育の機会」を奪われ続けた子どもだった

それでは、これらのアフガニスタンの直面する課題を克服するためにはどのようにすればよいでしょうか。

鍵の一つとなるのは、やはり教育ではないかと思います（図7）。今年8月のイランでの調査では、複数のアフガニスタン人から聞き取りをいたしましたけれども、皆が口々に指摘したのが、アフガニスタンの根本的な問題は教育不足であるという点でした。

ターリバーンは表向きイスラーム統治の実現を目標に掲げております。イスラーム統治とは、簡単に言えば「シャリーア」に則って国造りを進めるということです。このシャリーアとはイスラーム法と訳されることが多いのですけれども、成文法ではなく、唯一絶対の神であるアッラーから、西暦570年頃から632年まで生きた預言者ムハンマドに下された啓示「クルアーン」、そして預言者ムハンマドの言行「スンナ」に依拠したものです。その中でも特に、人間の行為規範に関わる部分を指します。

しかし、実際のところ、ターリバーンお抱えの地方のイスラーム法学者らの多くは、正しいイスラームに関する知識を欠いており、正しく布教することが

できていないと指摘されています。

ターリバーンは、イスラームとアフガニスタンの伝統と文化の観点から、環境さえ整えば女子教育を再開すると繰り返し表明していますが、正しい知識を持った多くのイスラーム法学者は、ターリバーンによる女子中等教育の制限はイスラームに反するとの立場を示しています。

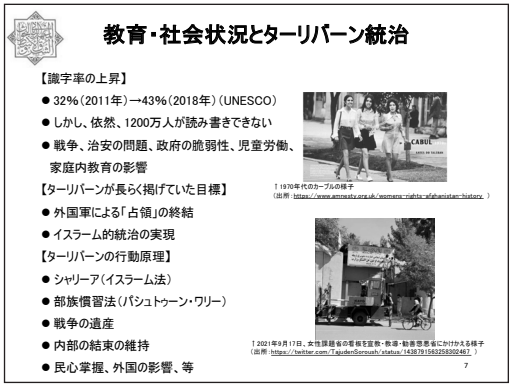
ターリバーンの戦闘員の多くは、戦争の時代の子どもたちであり、教育の機会を奪われて育ってきました。そういう時代が50年近く続き、アメリカと旧政権との闘いに勝利したと考えた彼らが、「今ようやく自分たちの時代が来たのだ」と、力による統治を押し進めている可能性があります。

ユネスコの報告によれば、アフガニスタンの識字率は２０１１年には32％だったものが、２０１８年には43％にまで増加しています。しかし、15歳以上のアフガニスタン人で読み書きができない人は依然として１２００万人いると見積もられています。そのうち７２０万人は女子です。

識字率が低い背景には様々な問題があります。アフガニスタンの人口は４０００万人近いので、何事も一般化して述べることには常に困難が伴います。しかし、アフガニスタンで教育を普及することができない主な要因としては、長年の戦争の歴史と治安の問題、政府の脆弱性に伴う教育省による活動の限界があると言えると思います。

また、子どもには学校に通うよりも農業や牧畜をはじめとする家の仕事を手

図7



伝って欲しい、という家庭の事情も多分にあると、私は考えます。さらに、女子は勉強より家の仕事をするべきだという保守的な考え方の家庭もあります。

もっとも、アフガニスタンは多様性に富む社会でありまして、子どもの教育に率先して取り組む家庭も、特に都市部では多いです。

ザーヒル・シャー国王時代、カーブルは地域で最も先進的な国・都市と呼ばれており、その教育水準は非常に高く、またカーブル大学の女子学生は西洋風の衣服を着ていたそうです。スライド（図7）の右上の写真ですね。

このように「女性の服装」「自由」の解釈については、アフガニスタン社会の中にも多様性があるので、今後実現していく可能性は十分にあると思います。

なお、現在のアフガニスタンでは、ターリバーンが設置する「宣教・教導・勧善懲悪省」が風紀の取り締まりを行っています。

◆異なる価値体系のもとでの教育とは

しかし、一つ言えるのは、家庭内での教育、より端的に言えば、親の教育方針が子どもの成長に大きな影響を与えるということです。私が知り合ったアフガニスタン人の多くは、パシュトゥーン人、タジク人、ウズベク人、ハザーラ人などの民族間の対立や差別を悪しきものと考えており、融和を大切にしています。「それが当たり前なのだ」という環境で育つと、そのような考えの人になります。これは学校の教育だけでは成し得ないものです。

一方、戦争孤児としてマドラサ（イスラームの教義を研究・教育する学院）で育ったターリバーン兵士の多くには、そのような考えを持たない人も多くいます。

このような家庭内教育の問題だけでなく、今後、アフガニスタンにおいて科学教育と宗教教育を、どうとらえていくかということも重要な点です。ターリバーンは、公には国民に等しく教育の機会を与えるという立場を示しておりますけれども、その教育の内容が、日本人が考える教育の内容と大きく異なる可能性があります。

そもそもターリバーンが実現したい社会のあり方、イスラーム統治というものが、民主主義、人権、法の支配などに代表されるようなリベラルな価値、自由主義的な価値に基づく統治とは大きく異なるものです。これは外部者による「良い」「悪い」といった価値判断とはまったく別に、厳然と存在する事実であります。

3　支援における今後の展望
― 伝統・文化とどう折り合いをつけるか

私たちはこの異なる価値体系の衝突に、いったいどのように対応していったらよいのでしょうか。今後の展望をいくつか述べたいと思います（図8）。

図8

展望

●改革は徐々に。

●外部からの「押し付け」は機能しない。和洋折衷の精神で、ギリギリの妥協点を。

●互いに傾聴の姿勢を保ちながら、何がしかの妥協や譲歩を出し合い、対話を通じて、よりよい未来を築いてゆく他ない。

8

アフガニスタンで物事を進めるにあたっては、何事も性急に行ってはなりません。特にアフガニスタン社会において、女性の尊厳は男性の名誉に直結する問題であり、日本人を含め外国人がこの問題に関わることには相当な慎重さを要します。

パシュトゥーンワーリーと呼ばれるパシュトゥーン部族の掟には「ナームース」という考えがあり、男性が他人の家の女性について話題にすることさえ禁物とされています。男性が自らの女性家族構成員の尊厳を侵害されたと考えた場合には、名誉を守るためにその女性家族構成員を殺すこともあります。俗に名誉殺人と呼ばれるものです。外部者は、このような男性優位社会であることを肝に銘じて関与する必要があります。

そういう特徴を踏まえた上で、女性の権利保障を進めるには、まずはアフガニスタンの男性の考え方を変えていく必要があると思います。

これまで述べてきましたとおり、アフガニスタンは保守的な男性優位社会です。欧米諸国が「女子教育を推進せよ」と圧力をかけた場合、外部から持ち込まれた思想や政治体制を、ターリバーンは「押し付け」と考え、アフガニスタンの伝統と文化にそぐわないものとして排除しようとするでしょう。

しかし、伝統や文化といったものは固定的なものではありません。たとえば、日本の団塊世代のジェンダー規範と団塊ジュニア世代のジェンダー規範は大きく異なります。これは一例ですけれども、伝統や文化や慣習というものは時代

とともに大きく変わっていくものです。アフガニスタンの隣国イランでは、女性による自由を求める抗議デモが今でも続いておりますけれども、これもイラン社会の世俗化の様子を表していると思います。

したがって、今日のお話に戻りますと、部族の掟であるパシュトゥーンワーリーやイスラームの解釈自体が可変的であるという可能性があります。つまり、私は地道な働きかけや啓発活動というものがまったく無意味ではないと信じます。

アフガニスタンの人々の目線に立ち、寄り添いながら決して押し付けにならないということが重要です。そのうえで、アフガニスタンの伝統・文化とどのように折り合いをつけるのか、和洋折衷の精神に倣って、ギリギリの妥協点を模索していく姿勢が求められるでしょう。互いに傾聴の姿勢を保ちながら、なにがしかの妥協案や譲歩案を出し合い、対話を通じて、よりよい未来を築いていくことが大切だと思います。

あらためてご説明するまでもありませんが、これはアフガニスタン人の諸勢力同士の和解や融和においても、アフガニスタン人と外国人との交渉においても言えることであります。その道のりは平たんなものではないかもしれませんけれども、「共存」は決して不可能ではないと信じたいと思います。

国際情勢が激動する今、アフガニスタンの問題にうまく対処できるか否かは、異なる思想を持つ集団が共存できるかどうかを推し量る、今後の試金石になる

のではないかと、私には感じられます。

私からのお話は以上とさせていただきたいと思います。本日は誠におめでとうございます。アフガニスタンの女子教育の発展をお祈り申し上げまして、私からのお話とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

各五女子大学の学生による国際協力活動の報告

お茶の水女子大学
津田塾大学
東京女子大学
奈良女子大学
日本女子大学

各五女子大学の学生によるパネルディスカッション

各五女子大学の学生による国際協力活動の報告

小田亜紀子（司会進行）（お茶の水女子大学 グローバル協力センター副センター長）：　ここからは、五女子大学の学生による国際協力活動の報告、続いて、パネルディスカッションを行います。進行は、お茶の水女子大学グローバル協力センターの平山雄大講師にお願いします。

平山雄大（お茶の水女子大学 グローバル協力センター講師）：　モデレーターを務めさせていただく平山です。よろしくお願いします。

本セッションは、マイクの受け渡し等がございますので、登壇者はマスクを着用いたします。ご了承いただきたいと思います。

早速、学生報告のセッションを始めたいと思います。本日は、大学が主催する取り組み、個人やサークルでの活動、そして、ゼミの活動の一環として国際協力を行ってきた学生が登壇してくださいます。前半は、それぞれの活動の報告をしていただき、後半のパネルディスカッションで、内容や想いを掘り下げていきたいと考えております。まずは、大学名の五十音順で、お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、そして日本女子大学の順に、活動報告をしていただきます。

それではお茶の水女子大学から、どうぞよろしくお願いします。

アフガニスタン勉強会

お茶の水女子大学1年リップルアメリ

報告1　お茶の水女子大学

アフガニスタン勉強会

文教育学部人間社会科学科1年　リップル アメリ

私からはアフガニスタン勉強会について報告させていただきます。

皆さん、こんにちは。私は、お茶の水女子大学文教育学部人間社会科学科1年のリップルアメリです。大学のアフガニスタン勉強会に参加し、学外では、日本で暮らすロヒンギャ難民の子どもの学習支援のボランティアをしています。

アフガニスタン勉強会は、毎週金曜日のお昼休みにグローバル協力センターで開かれています。センターのアフガニスタン出身の職員の方を中心に、アフガニスタン出身の留学生、そしてお茶の水女子大学の学部生などが集まり、知識や理解を深めてきました（図1）。

内容は、アフガニスタンと日本の関係、アフガニスタンの歴史、アフガニスタンにおける女性などの

図1

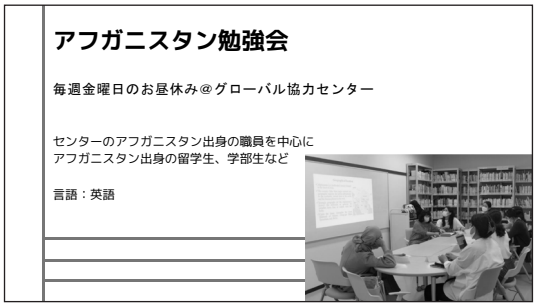


図2

内容

・アフガニスタンと日本の関係
・アフガニスタンの歴史
・アフガニスタンにおける女性
・タリバン前後の女性活動家
・子どもたちと戦争
・多様な民族
・ハザラの虐殺

基本的な情報から、タリバン前後の女性活動家、子どもたちと戦争、多様な民族、中でもハザラの人々の虐殺など、日本にいるだけでは知ることができない事柄にも着目するものでした（図2）。

勉強会を通して感じたことは、主に三つです。一つめは、皆が望んでヒジャブをつけているわけではないこと、二つめは、ハザラへの差別が知られていないこと、そして三つめは、国連の影響力は小さいこと、です。それぞれについて、少し詳しくお話しします。

まず、皆が望んでヒジャブをつけているわけではないということですが、アフガニスタン勉強会以前の私は、ヒジャブはイスラム圏の女性が必ず身に付けるものというイメージを抱いており、彼女たちの信仰を尊重しなければならないと思っていました。しかし、アフガニスタンの人々と実際に交流する中で、ヒジャブをつけている人といない人がいることを知り、私の中のバイアスを発見しました。信仰との向き合い方は人それぞれなので、「イスラム圏の女性だから」と一括りにせず、個人を見なければいけないなと感じました（図3）。

勉強会を通して感じたことの二つめは、ハザラへ

図3

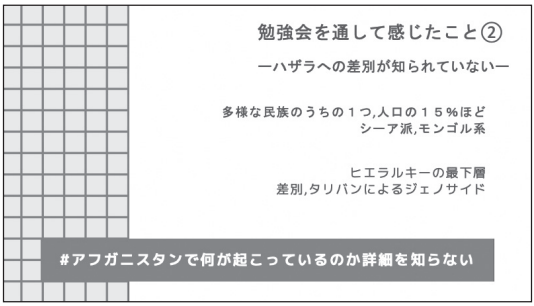
勉強会を通して感じたこと①

ー皆がヒジャブを望んでつけているわけではないー

イメージ：イスラム圏の女性がつけるもの,信仰
↓
・アフガニスタンではヒジャブは義務（タリバン）
・留学生の中にもつけている人といない人

＃私の中のバイハスを発見,一括りにするべきではない

図4



の差別が知られていないことでした。ハザラとは、アフガニスタンに居住する多様な民族の一つです。モンゴル系で、イスラム教シーア派の信者が多く、アフガニスタンではヒエラルキーの最下層に位置づけられ、差別に遭っています。そして、タリバンのジェノサイドの対象です（図4）。

グローバル協力センターのアフガニスタン出身の職員の方、そしてアフガニスタンからの留学生の多くが、このハザラの人々でした。写真や動画など、ハザラの人々に対する暴力の記録を見ながら、彼女たちは涙ながらに事実を伝えてくれました。私は胸がぎゅっと苦しくなり、知っているようで知らないことが本当にたくさんあると思いました。

勉強会を通して感じたことの三つめは、国連の影響力は小さいことです。アフガニスタンは歴史的に、イギリス、アメリカ、ロシアなどの大国に翻弄されてきました。現在もタリバンの統治下で、多くの人々が苦しんでいるにも関わらず、国連が介入できない状態が続いています。国連の限界と体制への疑問を改めて感じました（図5）。

勉強会を経て、私たちメンバーは、今の自分たちにできることはないかと考え、ディスカッションを

図5

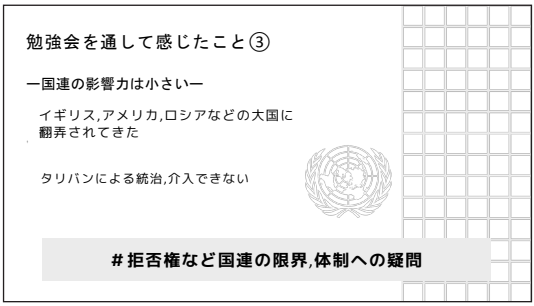
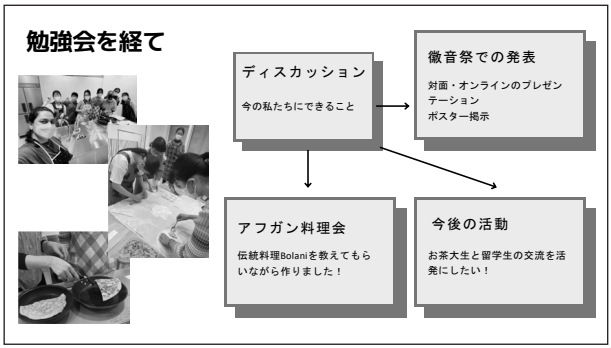


図6



重ねました（図6）。

そして、お茶の水女子大学の大学祭である徽音祭で発表を行うことにしました。対面・オンラインでのプレゼンテーションとポスター掲示によって、この勉強会を通して私たちが学んだことを、お茶大生や学外の方々に伝えたいと思います。

また、アフガニスタンについての知識を得るだけでなく、留学生の方と実際に交流して仲を深めたいという思いから、アフガニスタン料理会を企画し、アフガニスタンの伝統料理Bolani（ボラニ）を教えてもらいました。小麦粉を使った生地の中にフィリングを詰めて、油で揚げ焼きをして、トマトとニンニクと唐辛子を使ったソースと一緒に食べるという料理でした。

今後の活動方針としては、お茶大生と留学生との交流を活発にしたいと考えています。お茶の水女子大学にはアフガニスタンの留学生が多くいますが、やはり学部生とは距離があり、彼女たちと私たちが身近で関わる機会はまだ少ないのが現状です。これからは、お茶大生と留学生の距離を縮められるような活動をしていきたいと思っています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

平山：　ありがとうございました。

次は津田塾大学による活動報告です。よろしくお願いします。

報告2　津田塾大学

カンボジアにおける女子保健教育活動報告

学芸学部国際関係学科4年　伊藤 瑞季

私の方からは、津田塾大学におけるカンボジアの女子保健教育支援に関する報告をいたします。

私は、津田塾大学4年生の伊藤瑞季と申します。レアスマイルという津田塾大学の学生のみで構成された学生団体の代表を務めておりました。

レアスマイルは、設立当初はカンボジアの孤児院に対して食糧費の支援を行っていましたが、女性だけで構成されているという特長を活かした活動ができないかと考え、カンボジアの女性たちに保健教育支援を行うことにしました。

私たちは、「カンボジアでタブー視されがちな『女子保健』を伝えたい」というビジョンを持っています。

実は、カンボジアでは公立の学校で保健の授業が行われないため、生理や妊娠に対して十分な知識がないまま大人になる女性が多くいます。実際、私がお会いした方の中にも、生理がどういうものか分かっておらず、毎月、生理の期間は学校を休んでいたり、生理不順が数カ月間続いているにも関わらず放置していたりする女の子がいました。同年代の女性として、このような状況を改善

図1

活動内容

カンボジアの女の子に対する、生理や妊娠などの女子保健教育の支援

【国外活動】
・**年2回、カンボジアの孤児院/学校に対する教育支援**

【国内活動】
・現地語の保健教科書・動画の製作とその普及（2020年〜）
・支援先の子ども・スタッフとのオンライン交流

したいと考えて、このビジョンを掲げ、女子保健教育を支援する活動をしています。

具体的には、年に2回カンボジアに渡航して、現地の孤児院や学校で教育支援を行っています。加えて、新型コロナウイルス感染症の流行以降は、国内での活動にも力を入れており、現地語の保健教科書・動画を製作して、その普及に努めています。また、実際にカンボジアを訪問することができなくても、支援先の子どもやスタッフとの交流は続けたいと考え、オンラインで話す機会をつくるようにしています（図1）。

本日は、孤児院での支援活動について、少しご紹介いたします。

現在、レアスマイルは、ポーサット州にある孤児院で支援活動をしております。そこでの取り組みは大きく分けて三つあります。

一つめは、「共に考える」授業です。私たちが一方的に医学的な情報を教えるのではなく、「生理ってどうしてあるんだっけ?」「生理期間、こういう症状あるよね」「生理周期を自分でちゃんと把握している?」というように、対話形式で自分たちの生活に結びつけながら学んでいく機会になるよう心がけています。

支援活動の二つめは、個人の心身の悩み相談で、同年代の女性として、授業内では話しにくいような個人的な相談に乗る機会も設けています。

三つめは、現地スタッフとの「学び合い」です。私たちは、自分たちの支援

図2

孤児院での支援活動

2016年～　ポーサット州の孤児院で支援

・**「共に考える」授業**
生理・妊娠・性感染症など、実生活と結びつけて…

・**個人の心身の悩み相談**

・**現地スタッフとの学び合い**
自立した教育サイクルづくりのために

が終了した後もきちんと保健教育が行われるよう、自立した教育サイクルを作り出すことが支援のゴールだと考えています。そのためには現地のスタッフの育成が必要不可欠ですので、共に学び合うことを大切にしています（図2）。

ただ、実際に活動を行う中では、様々な悩みや課題に直面することもあります（図3）。

まず、コロナ禍でのチームビルディングの難しさを実感しています。私の一期下と現役メンバーは、コロナの影響でカンボジアに渡航することができず、活動の主軸である現地での教育支援を経験していないため、モチベーションを維持するのが難しいということがあります。さらに、オンラインによるミーティングでは、思うように意見交換ができないこともあり、コロナ禍での国際協力の在り方について、考えているところです。

また、先ほど、現地に自立した教育サイクルを生み出したいと申し上げましたが、実際には、現地の大人の理解を得ることの難しさを感じています。厚かましいとは思いつつ、現地スタッフの方に「こういうような教育をさせてください。良かったら協力してください」とお願いしても、なかなか理解して

図3

活動を行う中での課題・悩み・葛藤…

コロナ禍のチームビルディングの難しさ
・現役メンバー全員が渡航経験無し
　→モチベーション低下
・団員間のコミュニケーションの取りづらさ

教育支援の理想と現実
・現地の自立した教育サイクル確立を目指しているが、
　理解を得ることやスタッフ育成の難しさ

いただけないこともあります。

このように教育支援の理想と現実の狭間で葛藤することもありますが、今後もカンボジアの女性の生活や未来のために活動していきたいと考えております。

私からの報告は以上となります。ありがとうございました。

平山： ありがとうございました。

次は東京女子大学による活動報告です。よろしくお願いします。

報告3　東京女子大学

オンライン学習支援

人間科学研究科博士前期課程2年　五嶋 友香

これから、私が行っているオンライン学習支援について発表させていただきます。最初に、簡単に自己紹介をし、続いて、活動の概要や立ち位置、私たちの役割などについてお話しいたします。

私は、現在、東京女子大学の大学院博士前期課程に在籍し、日本語教育や多文化共生について学んでいます。学部2年生の時から、副専攻として、日本語

教員養成課程を受講しており、今回ご紹介するオンライン学習支援の活動は、この課程の受講生と修了生によって行われているものです。

私は日本語教育の中でも、特に子どもの日本語教育に興味関心があり、修士論文では、複数言語環境で育つ子どもに焦点をあてて、「ことば」「教育」「アイデンティティ」をキーワードとして研究を進めています。

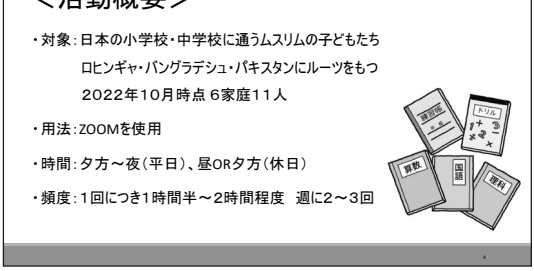
それではここからオンライン学習支援について詳しくお話ししたいと思います。

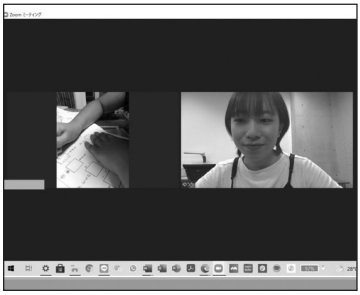
先ほど申し上げたとおり、この活動は、日本語教員養成課程の受講生と修了生によって行われているもので、現在は20名が、日本の小中学校に通うムスリムの子どもたちの学習支援をしています。子どもたちは、ロヒンギャ、パキスタン、バングラデシュなどにルーツをもっています。

私たちが行っているのは教科学習支援なので、主にその日の学校の宿題やこれまで習ったことの復習、テスト勉強などのサポートをしています（図1）。

ＺＯＯＭを使用し、子どもたちは、各家庭からパソコンやiPad、スマートフォンなどを使って参

図1





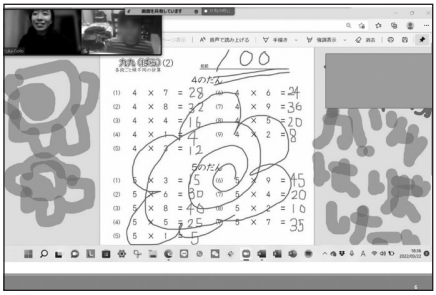


図2

加します。保護者の方が、お子さんの手元をカメラで写してくれることもありますし、問題を画面共有して書き込みながら学習を進めることもあります（図2）。

次にこの活動の立ち位置についてお話しいたします。

この活動は、日本語教員養成課程の学生の「学びの場」であり、子どもたちと共に「学び合う」活動です。便宜上、「学習支援」と呼んでいますが、私たちは一方的な支援ではなく、「学び合い」という認識で取り組んでいます。そのため、「子どもだから教わる立場」「大学生・大学院生だから教える立場」という固定された関係ではありません。私たちが子どもたちから学ぶこともたくさんあります。ですから、私たちは、子どもたちに対して、「助けてあげる」「支援してあげる」という上からの目線ではなく、常に対等な目線で向き合うことを大切にしています（図3）。

そうすることで、子どもたちは私たちに心を開き、色々な話をしてくれます。私たちは、何でも話せる「お姉さん」として、子どもたちの相談相手になることもあります。

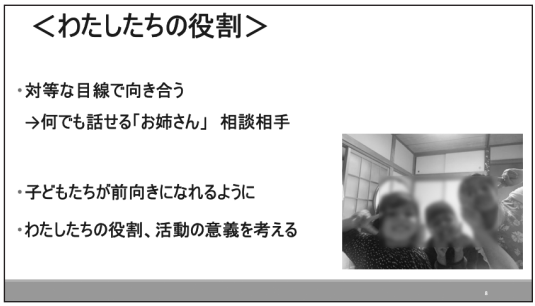
図3

＜活動の立ち位置＞

- 日本語教員養成課程受講生（学部生）、日本語教育分野の院生の「学びの場」
- ともに「学び合う」活動

- 「子ども＝教わる立場」「学生＝教える立場」 ×
- 対等な目線で向き合う

図4



例えば、「僕って、肌が黒いから黒人なの?」とか「日本人の友だちがいないんだ」と言われたことがありました。このような時どのように答えるべきなのか、正直とても悩みます。子どもたちを傷つけないように慎重に言葉を選びますが、曖昧な返事だと、かえって子どもたちの心の中にはもやもやが残ってしまうかもしれません。完璧な回答はできないとしても、子どもたちが少しでも前向きになれるように手助けをすることも、私たちの役割だと考えています。

つい先日、ある子どもが、「この学習支援を始める前は、日本人は怖いと思っていたけど、お姉さんと一緒に勉強してから、日本人は怖くないと思った」と話してくれました。この言葉をきっかけに、改めて、私たちの役割って何だろうと考えるようになりました（図4）。

さいごに、改めてお伝えしたいことがあります。

それは、対等な目線で寄り添うことにより、子どもたちとの関係性が拡がり、より深くお互いを知ることができる、ということです。どのような活動であっても、相手のことをきちんと理解することが大切です。そのための第一歩は、「支援する側」「支援される側」という立場を離れて、対等な目線で向き合うことだと私は思います。今後も、さまざまなことに挑戦していく中で、この気持ちだけは忘れないようにしたいと思っています。

これで発表を終わりにします。ありがとうございました。

平山：　どうもありがとうございました。

次は奈良女子大学による活動報告です。よろしくお願いします。

報告4　奈良女子大学

奈良女子大学 国際協力サークル HUA（ほあ）

生活環境学部文化情報学科1年　津田明子
生活環境学部住環境学科2年　小濵　萌
生活環境学部情報衣環境学科3年　松成更紗

奈良女子大学国際協力サークル HUA（ほあ）の発表を始めます。本日、発表を務めさせていただきます、津田と小濵と松成です。よろしくお願いします。

津田：　HUAのメンバーは、現在、1年生から3年生の11名で、自分たちはもちろん、周りの人たちも、大学生活の中で、ちょっと「イイコト」ができるような取り組みをしています（図1）。

主な活動は、フェアトレードの推進、アースデイ奈良という学外イベントへの出店、TFTフェアの企画、大学祭への参加です（図2）。

フェアトレードとは、「公平・公正な貿易」という意味で、発展途上国の原

図1

図2

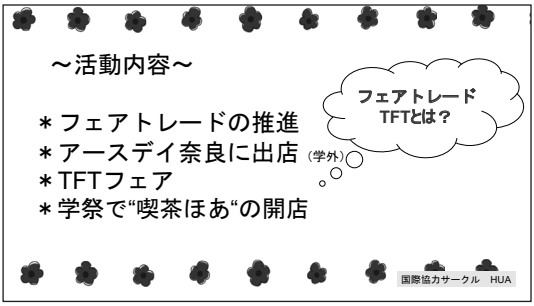


図3

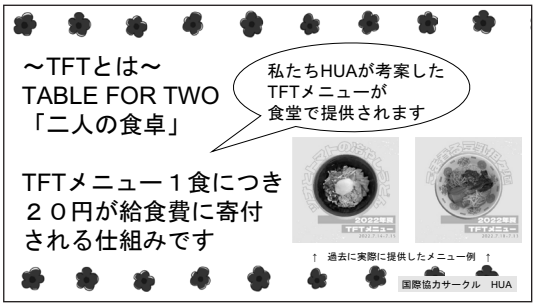
料や製品を適正な価格で購入することにより、生産者や労働者の生活改善と自立を支援する活動です。フェアトレード商品のチョコレートやコーヒーを目にしたことがある方も多いのではないでしょうか。私たちは、フェアトレードを推進するため、アースデイ奈良や大学祭で、フェアトレード商品の販売や紹介を行っています（図3）。

小濱：　ここからは、具体的な活動内容を三つ紹介いたします。

まず一つ目は「TFT」です。これは、「TABLE FOR TWO（二人の食卓）」の略で、TFTメニュー1食につき20円が開発途上国の子どもたちの給食費に寄付される仕組みです。私たちHUAは、年に2回、夏と冬にTFTフェアを開催しています。この期間中は、私たちが考案したヘルシーなTFTメニューが生協食堂で提供され、毎回7千円ほどの寄付金が集まります（図4）。

二つめの活動は、年に1度、4月に開催されるアースデイ奈良への出店です。

図4



私たちは、そこでフェアトレード商品のコーヒー、ポーチなどを販売しています。学外イベントであるアースデイ奈良への参加は、多くの方々にフェアトレードを知ってもらったり、自分たち以外の方々の活動を知ったりできる、貴重な機会となっています（図5）。

三つめは、大学祭への参加です。毎年11月に開催される恋都祭で、私たちは、フェアトレード商品の紹介・販売や活動内容に関する展示などを行っています。今年は、昨日と今日（3日・4日）開催されていて、フェアトレード商品であるチョコレート、クッキー、コーヒー、紅茶などを販売しています。さらに、私たちの活動をまとめたポスターなどを展示して、より多くの方々に、ＴＦＴやフェアトレードについて知っていただく工夫もしています（図6）。

松成：　最後に、私たちが活動の中で感じている悩みや葛藤を二つお話ししたいと思います。

一つめは、フェアトレード商品を販売する際の悩みです。私たちは、実際に商品を生産している現場に行ったことがないので、その商品を手に取ってくださる方に、詳しい背景や生産者の想いを伝

図5

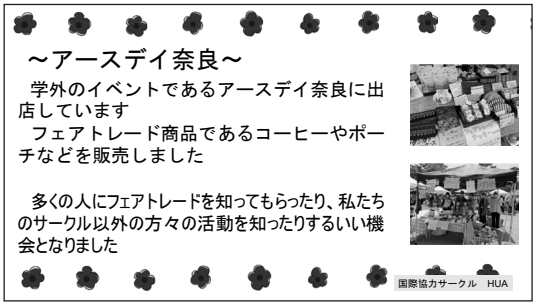


図6

～恋都祭（学祭）　喫茶ほあ　～

フェアトレード商品の紹介・販売や活動内容に関する展示などを行っています

▽2022年に取り扱ったフェアトレード商品
・チョコレート（tohi）・クッキー（ネパリ・バザーロ）
・コーヒー豆、粉（SISAM COFFEE）・紅茶（第三世界ショップ）
・タイ少数民族ポーチ（カレン族、ラフ族、リス族、モン族）
・ジュートコットンパスケース（シャプラニール）

国際協力サークル　HUA

えきれないと感じています。

もう一つは、ＴＦＴフェアに関することです。新型コロナウイルス感染症の影響で生協食堂の運営形態が変わったことにより、提供できるメニューの種類と販売数が減ってしまい、寄付金が以前ほど集まらなくなっているのが現状です（図７）。

このように、コロナ禍で思うように活動できないこともありますが、今後も日常に取り入れることができる国際協力を広める活動を続けていきたいと考えております。

以上で、奈良女子大学国際協力サークルＨＵＡの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

平山：学園祭の最中にも関わらず、ご登壇いただきありがとうございました。最後は日本女子大学の活動報告です。よろしくお願いします。

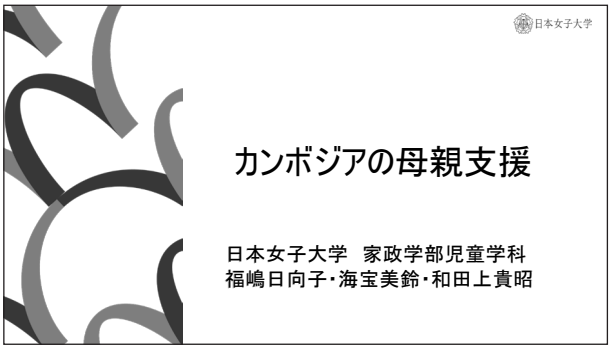
図7

～活動の中での悩み・葛藤～

・アースデイで商品のポップを作るときやお客さんに商品の説明をするときに現地に行ったことがないため、上手く伝えられなかったこと

・コロナの影響で食堂の提供形態が変わり、TFTフェアで提供できる商品の数が減ったこと

国際協力サークル　HUA



報告5　日本女子大学

カンボジアの母親支援

家政学部児童学科３年　福嶋　日向子
家政学部児童学科３年　海宝　美鈴

日本女子大学のカンボジアの母親支援についての活動報告を始めます。本日発表いたしますのは、日本女子大学家政学部児童学科３年の福嶋と海宝です。よろしくお願いいたします。

福嶋：　私たちは、社会福祉学をご専門とされている和田上貴昭先生のゼミに所属しております。本日はゼミの活動として行ったカンボジアの支援についてご報告いたします。これまでのゼミの活動、「Mother to Mother」の取り組みをご紹介しつつ、カンボジア支援を行うに至った経緯をお話しし、２０２２年の活動を振り返りたいと思います。

まず、私たちのカンボジア支援の経緯についてお話しします。

和田上先生のご友人が、カンボジアの児童養護施設の支援をされていたことがきっかけとなり、２０１９年の２月にゼミ合宿でカンボジアのシェムリアップを訪問したことが支援の始まりです。

図1

カンボジア訪問の主な内容　2019年2月～

1. 児童養護施設での子どもたちとの交流
2. 小学校での子どもたちとの交流
3. **Mother to Mother　見学**
4. 小さな美術スクール　見学
5. 地雷博物館　見学

➡2021年度以降　コロナ禍の影響により中止…

カンボジアでは、児童養護施設や小学校で子どもたちと交流したり、Mother to Motherの活動や小さな美術スクール、地雷博物館などを見学したりました。しかし、２０２１年度以降は、コロナ禍の影響によりカンボジア訪問は中止となってしまっています（図１）。

それまでのゼミの活動は、カンボジアを訪問し、子どもたちと直接交流することを前提としたものでしたが、コロナ禍によりそれができなくなり、そうした状況の中で自分たちに何ができるかを改めて考えました。そして、カンボジアを訪問した際にご縁のあったＮＰＯ法人ＡＳＡＰ（アジアの子どもたちの就学を支援する会）の活動の一つであるMother to Motherのお手伝いをすることになりました(図２)。

Mother to Motherは、日本とカンボジアのお母さんたちを繋ぐ活動です。きっかけは、日本で市販されている大量生産品の布袋は、子どもたちが使いにくいという声があったことでした。しかし、さまざまな事情により、子どもたちが使う布袋を手作りすることが難しい保護者もいらっしゃいます。

一方、カンボジアのお母さんたちは、子どもを学校に通わせたいけれども、学費が足りないという問

図2

ゼミの活動

【コロナ以前】 家庭環境等により、過酷な状況に置かれる子どもについて知り、できることを考える

⇩

【コロナ禍】 カンボジアの子どもたちと直接交流ができない中で、自分達に何ができるか

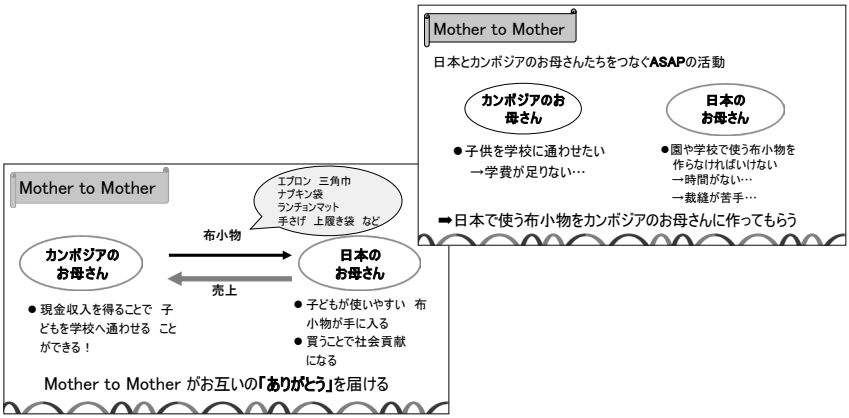
⇩

Mother to Motherのお手伝い

題を抱えていました。

そこで、日本で使う布袋をカンボジアのお母さんに作ってもらい、それを日本のお母さんが購入するようにすれば、双方の問題が解決できると考えたわけです。お互いに助け合い、「ありがとう」を届けることが、Mother to Mother の活動です（図3）。

図3



海宝：次にゼミでの具体的な取り組みについてお話しします。

私たちは、10月15日、16日に開催された目白祭で、Mother to Mother のバザーを開催し、売り上げをＡＳＡＰに寄付しました（図4）。ただ商品を販売するだけではなく、来校された方に、カンボジアのことやＡＳＡＰの活動を紹介したいと考え、自分たちで調べ、模造紙にまとめて展示しました（図5）。二日間の売り上げ合計は７４，５８０円で、特にクリスマス雑貨や巾着袋を買ってくださるお客様が多かったです（図6）。

私たちが想像していた以上にたくさんの方が関心を持ってくださり、お子さん用としてだけでな

図4

図5

図6

く、大人の方が自分用に購入されたケースもありました。そして、実際に市販品より使いやすいというお声をいただいたことが、とても印象に残っています（図7）。

一方で、問題点として、次回以降の購入につながらないこと、大学生など若い世代の関心が低かったことが挙げられました。そこで今後は、品物と一緒にASAPのパンフレットをお渡ししたり、オンラインショップの情報をお伝えしたりすることが必要だと考えています。また、現時点では、Mother to Motherの直接的な対象ではない学生が、将来、親になったときにこの活動を思い出してくれるよう工夫したいと思います（図8）。

最後に今後の活動の目標についてお話しします。今後は、若い世代を中心に、より幅広い世代へカン

図7

目白祭の活動を終えて

◆**感想**

・想像より多くの人が関心を持ってくれた

・子どものいるご家庭だけでなく、大人の方も購入してくれた

・実際に市販品より使いやすいという声があった

・商品の柄や種類が豊富

図8

◆目白祭での問題点

・次回以降の購入につながらない
　→ASAPのパンフレットを購入者には必ずお渡しする
　　オンラインショップの宣伝をする

・大学生などの若い世代の関心が低かった
　→そもそも直接的な対象ではない？
　→活動だけでも知ってもらい、親になったときに
　　思い出してもらえるようにする

図9

まとめ

◆今後の活動の目標

・若い世代を中心に、より幅広い世代へカンボジア支援の
　活動を広める

・カンボジアの母子支援や教育支援などへの理解を深める

ボジア支援の活動を広めていくことと、カンボジアの母子支援や教育支援などへの理解を深めること、この2点を目標として活動していきたいと考えております（図9）。

以上で、日本女子大学の発表とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

平山：　皆さん、それぞれ大変興味深い活動のご報告をどうもありがとうございました。

それでは、後半のパネルディスカッションの設営を行いますので、しばらくお待ちください。

各五女子大学の学生によるパネルディスカッション

平山：　お待たせしました。それではパネルディスカッションに移りたいと思います。

最初に私から2点ほど個別に質問をさせていただければと思います。

まず、お茶の水女子大学のアメリさんにお聞きします。国際協力活動の一歩目は、やはり、学ぶこと、知ることであると思います。今回ご報告いただいたアフガニスタン勉強会を通して、それはある程度達成されたのではないかと思います。その次のステージに関して、先ほども少しお話がありましたけれども、もしよろしければ、国際協力という観点も少し織り交ぜつつ、もう少し詳しく教えていただけませんでしょうか。

リップルアメリ（お茶の水女子大学1年）：　はい。私自身は、国際交流は国際協力の一つではないかと思っています。現地に行ったり、国とか政府という大きな組織を動かしたりすることができなくても、「知る」ことが支援の第一歩ではないかと考えていますので、今後は、このアフガニスタン勉強会の輪をどんどんお茶大生に広げていきたいです。

アフガニスタン勉強会のメンバーである私たち、そしてお茶大生が、アフガニスタンについてこれまで知らなかったことを知り、何か自分たちにできることはないかなと考える、それが、もう国際協力ではないかと思います。そういう学生が、どんどん増えて欲しいという思いもあり、来週開催されるお茶大の大学祭 徽音祭で、アフガニスタン勉強会の報告発表をする予定です。

また、今、ツイッターで「#StopHazaraGenocide」という運動があります。このようなＳＮＳ上の

活動を自分で調べて、実際に参加してみることも、身近な国際協力の一つですので、こういったことに興味を持ってくれる学生が、どんどん増えてくれたらいいなと思っています。以上です。

平山：　ありがとうございます。そうですね。特に印象に残ったのは、「国際交流も国際協力の一つではないか」という指摘で、私も共感するところが大きいです。特に学生の国際協力活動を考えるうえでは、「交流」、つまり、人と人とのつながり、そして、出会いが発展していくということが、一つの大きなテーマなのではないかと、お聞きしていて思いました。どうもありがとうございます。

それでは、もう一つ、個別で質問させていただければと思います。

東京女子大学の五嶋さんに質問させてください。学生による国際協力活動ということで、大学での日々の学びがどのようにその活動に生きているのか、もしくは逆に、活動での経験が大学の学びにどのように影響し、反映されているのか、この点が、教員の立場としては非常に気になっているところです。五嶋さんは、先ほどの活動報告で、ご自身の活動を日本語教員養成課程の学生の学びの場と位置付けておられましたので、この点に関して、少し詳しく教えていただければと思いました。お願いします。

五嶋友香（東京女子大学大学院博士前期課程２年）：　先ほどの発表でも少しお話をさせていただきましたが、私たちのこの活動は、日本語教員養成課程の受講生や修了生による学びの場です。私たちと子どもたちは、支援する側・される側、あるいは、子どもだから教わる立場、大学生・大学院生だから教える立場という、固定された関係性ではありません。子どもたちと対等な目線で寄り添うこと、

そして、お互いに相手のことを知ろうとする姿勢をとても大切にしています。こうしたことが活動の軸になっているところに、日本語教員養成課程の学びが生きていると、私は感じています。

また、この活動は、日本語教育が単に日本語を教えるだけではないこと、そして、日本語教育には人と人とをつなげる役割があることを示唆しています。これは本学の日本語教員養成課程で最初に学ぶことですので、私はこの点にも学びが生きていると思います。

私だけでなく、共にこの活動をしている仲間もおそらく同じことを感じていると思います。

平山：　なるほど。ありがとうございます。

そうですね。単に日本語を教えるだけではないというところが、特に印象に残りました。学びの「学際性」あるいは「重層性」と言ったらいいんでしょうか、それがどのように活動に生きて、また逆に学びに返ってきているのかがわかりました。ありがとうございました。

それでは、私ばかりが話していてもつまらないですから、ここからは、学生の皆さんの双方向的なコミュニケーションの時間にしたいと思います。他大学の方に質問してみたいこと、例えば、この点についてもう少し詳しく知りたいとか、この課題をどうやって乗り越えたのかを教えてほしいとか、そういうことがあれば、是非、おっしゃっていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

（複数の挙手）はい、それでは、日本女子大学の福嶋さん、お願いします。

福嶋日向子（日本女子大学3年）：　ここ数年の活動はコロナ禍の影響がすごく大きくて、実際に、私たちもカンボジアに訪問できないなど、活動の難しさを感じました。他大学の皆さんも、先ほどの

報告で、コロナの活動への影響やコロナ禍における活動の難しさに少し触れられていましたので、もう少し詳しいお話を伺いたいと思います。学生団体として活動されていた津田塾大学さんと奈良女子大学さんにぜひお聞きしてみたいです。

平山：　ありがとうございます。そうしましたら、津田塾大学の伊藤さん、奈良女子大学の皆さんもしくは代表してお一人、お答えいただければと思います。お願いします。

伊藤瑞季（津田塾大学4年）：　先ほど、カンボジアの女子保健教育支援の一環として、国内での活動にも力を入れており、現地語の保健教科書・動画を製作しているとお話ししましたが、実はこれはコロナ禍の苦悩を生かし、乗り越えるための活動です。

私たちの団体は、カンボジアに渡航することを前提としている組織ですので、現地に渡航できないことにより、すごくモチベーションが低下していると感じています。ただ、そのような状況下でも、カンボジアの女性たちに情報を届けたい、カンボジアとのつながりを維持したいという強い気持ちは、団員全員一致していました。そこで、このたびのコロナ禍を、充電期間というか、むしろ新しいことに挑戦する良い機会だと考え直し、現地語での保健の教科書の製作に取り掛かりました。

ただ、その過程で何度もミーティングを重ねる必要があり、それをオンライン上で行う難しさを感じました。オンラインでの議論は、いい意味でも悪い意味でも、無駄がないと思います。ただ、国際協力についての議論は正解があるわけではなく、団員の感情、一人一人の経験、あるいはふとしたひらめきなど、時として無駄とされるものが非常に大事だと感じますので、オンラインミーティングを

行う際には、いろいろと工夫をしました。

中でも、自分たちの感覚として有効だった方法は二つあって、一つは、ミーティングを始める前に、少人数で集まって、思いついたことをオンライン上で率直に話し合う練習をするようにしたことです。もう一つは意識の話で、「私たちは、お互いを気遣って気まずくならないようにするために集まっているわけではなく、カンボジアの女性たちのために何かしたいという思いで集まっているよね」ということを繰り返し確認していました。

どちらも当たり前のことですが、オンライン上だからこそ、当たり前を口にするのが大事だったなと感じております。以上です。

平山：　ありがとうございます。

確かにコロナ禍で色々なものがオンラインに切り替えられました。大学の授業もそうでした。個人的には、授業開始前の教室での何気ないやり取りや、授業が終わった後の質問から始まるちょっとした発展的な話も大事だと考えているのですが、オンラインでそういうことをするのは難しいなと感じています。国際協力活動やサークルの活動においても、そのあたりが問題になるわけですね。今、伊藤さんは対策と工夫も述べてくださいましたけれども、非常に良いご指摘だと思いました。

では、奈良女子大学の皆さん、お願いします。

松成更紗（奈良女子大学3年）：　コロナの影響で色々と制限がある中では、工夫して柔軟に対応していくことが必要になります。私はこの点に難しさを感じました。

例えば、先ほど私たちの活動の一つとしてご紹介したＴＦＴフェアは、コロナ前と同じやり方では人や寄付金が集まりにくくなりました。そこで、それまであまりしてこなかったＳＮＳによる活動周知に力を入れ、ＴＦＴフェアの開催目的や私たちＨＵＡの日々の活動を発信していくことにしました。さらに、イートインだけではなくテイクアウトもできるように、実施方法を変えることで対応してきました。以上になります。

福嶋：　ご回答ありがとうございました。津田塾大学さんも奈良女子大学さんも、新しいことに挑戦したり、やり方を工夫して柔軟に対応されていたりして、すごく素敵だと思いました。ありがとうございました。

平山：　ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

では、津田塾大学の伊藤さん、お願いします。

伊藤：　先ほども、私の団体では、渡航経験のないメンバーのモチベーションの低下がすごく問題になっているというお話をさせていただいたんですけれども、この点についてお聞きしたいと思います。現地に行ったり、支援対象者と直接関わったりすることができない中で、国際協力を自分事としてとらえるために、どのような工夫をされているのか、奈良女子大学と日本女子大学の方にお伺いしたいです。

平山：　ありがとうございます。先ほどのコロナ禍をめぐる話の延長線上にある問題ではないかと思いますが、いかがでしょうか。

小濵 萌（奈良女子大学2年）：　私たちは、国際協力を目的としたサークルなので、メンバーはそれぞれ、入部する段階で、国際協力に興味を持ち、国際協力をある程度、自分事としてとらえているのではないかと思います。実際にメンバーに入部した動機を聞いてみたところ、ニュースや高校の授業、大学の講義を通して途上国の様子を知り、実際に現地に行ったり、直接の交流をしたりする機会はなかったけれども、何か自分にできることはないだろうか、と考えていたとのことでした。

　現在の活動としましては、私個人の話にはなるんですけれども、サークルの活動とは別に、途上国で活動されている方のお話を直接お聞きしたり、国際協力に関連のあるワークショップに積極的に参加したりすることを通して、国際協力活動を自分事として考えるようにしています。

　他のメンバーも同様に、このサークル以外にもさまざまな活動に目を向け、参加することによって、国際協力を自分事として考えているのではないかと、私は考えております。

平山：　アンテナを張りめぐらすと言ったら良いでしょうか、常に、外に向けて目を光らせていて、ニュース等で国際協力の観点を深めていくというご意見でしたね。ありがとうございました。

　それでは、日本女子大学の皆さん、いかがですか。

海宝美鈴（日本女子大学3年）：　私たちは、ＺＯＯＭなどを使用して、現地の方たちと交流する機

会を設けることが大事だと考えています。今はまだ、直接お会いするのは難しいと思うのですが、現地の方の声を聞くことによって、現地の様子が具体的にイメージできるという側面はあります。実際に、ゼミではカンボジアの方へのインタビュー動画を見て、現地の状況を知るという経験をしましたので、直接お会いできなくても、交流する機会を作るのは大事だと思います。

あとは、今の自分にどういう支援ができるのかを具体的に考えることが大切だと考えています。

例えば、カンボジアの支援をしようと思ったときに、学校を建てるというような大規模なことはすぐにはできませんが、Mother to Mother の商品を買うことであればできます。支援の規模にとらわれず、今、自分の力でできる支援を探すことが大事で、そうすることによって、国際協力を自分事としてとらえることができるのではないかと考えています。以上です。

伊藤：　ありがとうございました。

私たちもいろいろ模索はしていたのですが、それ以外にも支援対象の方と繋がれる可能性があることがわかりました。勉強になりました。

平山：　ありがとうございました。

そうですね。オンラインであっても、交流はでき人とのつながりが持てる、そこが国際協力の土台になるんじゃないかというご意見でした。もしかしたら、さきほどお茶の水女子大学のアメリさんがおっしゃった、国際協力と国際交流は、実はそこまで明確な区別はないのではないかというお話ともつながるのではないかと、お聞きしていて思いました。

それでは続いて、奈良女子大学の津田さん、ご質問お願いします。

津田明子（奈良女子大学1年）：　私は小さい時から、ニュースなどを通して貧困等の問題を知り、強い関心を持っていたので、このサークルに入りました。これから活動をしていく中で、異文化や立場の違う方々と接する機会も多くなるのではないかと思っています。皆さんが、そういう時に気を付けていることや大切にしていることなど、ぜひ、教えていただきたいと思います。

平山：　ありがとうございます。

異文化理解や他者理解についてのご質問かと思います。先ほどのご発表でも、例えば、東京女子大学の五嶋さんから、支援者とどのように向き合うかというお話がありましたが、やはり、他者理解や異文化理解は、国際協力活動の肝と言ってもいい重要なテーマではないかと、私も考えています。支援対象の国、地域もしくは人について、その現状や課題をどう見るのか、どう学んでいくのか、どう理解するのか、そういう話にも結び付くのではないかと思います。

それでは、お茶の水女子大学のアメリさんから順番にお願いします。

アメリ：　授業でも他者理解や異文化交流について考える機会があり、本当に難しいといつも感じています。

例えば、相手の文化を尊重しようと考えた時に、それを意識しすぎるあまり、相手と距離ができてしまったり、対話ができなくなったりしまうのではないかという懸念が、私にはあります。また、自

分の中にバイアスがあることを、いつも意識しています。どんなに気をつけていても、偏見や知らないことがたくさんあると思うので、まずは相手を固定概念で見ないように気を付けています。自分は偏見を抱きがちなんだということを前提として、相手と接するようにしています。

伊藤：　先ほどお話ししたとおり、私たちの団体では、現地のスタッフの方と性教育について議論する機会とか、お願いするような場面が多くあるので、異文化理解は重要な課題だと考えています。

そこで、文献とかインタビュー調査、それから勉強会を通じて、カンボジアの文化的・歴史的背景を勉強するようにしています。そうした中で、カンボジアには年長者を敬う文化が根付いていることがわかりましたので、実際に接する際には、相手にとっての自分は、年に2回やってくる異国の女の子だ、ということを自覚して行動するようにしていました。

例えば、何かお願いをする時にも、その背景にある自分の本音ベースの考えまで、きちんと誠実にお伝えしたうえで、判断は相手に委ねるようにしました。また、スタッフの方に性教育の知識を提供する時には、私たちが「教える」という形をとるのではなく、現地語で書かれた性教育の本を持っていって、「こういうのがあるんですけれど、ちょっと言葉が分からないので、一緒に読んでいただけませんか」とお伝えし、一緒に学ぶという姿勢を忘れないよう心掛けていました。以上です。

五嶋：　私が関わっている学習支援の場合、他者理解や異文化理解というのは、子どもたちやその母親との関わり方の問題になるかと思います。

今、ご質問をいただいて振り返ってみますと、私は、対象の子どもやその母親を、「外国人」とか「子

ども」というカテゴリーでは捉えないようにし、自分と同じ国で暮らしている一人の人間として接するよう心掛けています。ただ、これは意識的に自分の考え方を変えたというよりは、この活動を通して自然とそうなった感じです。

もちろん、異文化理解や多文化共生を進める中では、カテゴリーが必然的に関係してくる場面もあると思います。その一方で、相手を外国人とか子どもという決められたカテゴリーに当てはめないで、日本で暮らしている一人の人間として接するようにすれば、それが相手にも伝わるように感じています。

福嶋：　私は、当たりまえのことではあるのですが、現地の方の声をしっかり聴くことによって、対象国への理解が進むと考えました。もちろん直接交流することが望ましいですが、例えば、今のコロナ禍の状況のように直接お会いすることができなくても、ＺＯＯＭを活用するなど工夫をすれば、現地の方の声を聞くことはできると思っています。

先ほど海宝さんからも少しお話があったのですが、実際に、私たちは活動を始める前に、ＺＯＯＭを使ってカンボジアの方にインタビューをした動画を見て、学びを深めました。これは重要だったと思っています。現地の方の目線から、現状や課題を知ることで、具体的にどのような支援が必要とされているのかが明確になって、より対象者に寄り添った支援ができるのではないかと考えています。以上です。

津田：　ありがとうございました。

特に、相手をカテゴリーとして見るのではなく、自分と同じ一人の人間として見るという姿勢は、私もこれからすごく大事にしていきたいなと思いました。

平山： ありがとうございました。

そうですね。とかく我々はカテゴライズしがちですね。例えば、女子大学生とか、草食系男子とか、何々人とか、難民とか……、そんなふうに一括りにしても、今、ご指摘のあったとおり、個々の違いがあるわけです。「日本人は〇〇である」と言っても、それにあてはまらない日本人も必ずいるわけで、やはり多様性があると、伺っていて感じました。

それから、先ほど私は、他者理解や異文化理解は国際協力の重要な要素だと申し上げましたが、国際協力に限らず、人と人とが関わる場においては避けて通れない重要な視点ではないかと感じました。例えば、私は、妻がどう感じているか、どのように思っているのか、あるいは、どうしたら彼女の気持ちを大切にできるのか、といったことを日常的に考えているわけですが、そういう考え方とか身近な人との接し方が、めぐりめぐって国際協力活動とか国際交流活動とか、より大きな視点につながっていくのではないかと、皆さんのお話をお聴きしていて思いました。

さて、終了時間が近づいてきましたので、一度ここで区切らせていただきたいなと思います。

本日ご登壇いただいた皆さんは、学生としての活動の難しさや葛藤にも触れてくださいましたけれども、学生だからこそできること、もしくは学生ならではの目線が生かされた活動とその可能性も感じられる時間になったように思っています。このパネルディスカッションを通して、ご参加くださった方々、特に学生の皆さんに、国際協力活動について考え、アクションを起こしていくためのヒント

のようなものが提示できていましたら、モデレーターとしても大変嬉しく思う次第です。

それでは最後に、学生の皆さんから、今後の活動の展望、もしくは、それぞれの今後の目標について一言ずついただきたいと思います。日本女子大学の海宝さんから順番にお願いします。

海宝：　今日、他の女子大学の方のお話を聞いて初めて知ったこともたくさんあって、とても勉強になりました。他の方の活動を知るのはなかなか難しいことなので、私たち自身も、自分たちのしていることを外に向けて発信していくことが大事だと感じました。

Mother to Mother の活動など、自分が携わった活動を広めていきたいのはもちろんですが、今回のように、他の方の国際協力活動について、自ら勉強していくことも忘れず続けていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

福嶋：　本日は、他大学さんの活動や想いを知ることができて、自分の視野の狭さを感じました。また、国際協力活動について改めて考える貴重な機会になりました。

それだけで終わりにするのではなく、本日学んだことや感じたことを、ゼミのメンバーや家族、友人にも話し、共に考え続けていくことが大切かなと思いました。本日はありがとうございました。

津田：　たくさんの方のお話を聞くことができ、自分自身の視野が広がったように感じています。帰ったら、サークルのメンバーに今日のことを報告して、よりよい活動にしていけたらと思います。ありがとうございました。

小濵：　私は、サークルでやっているフェアトレードやＴＦＴ活動等を通して、主に経済的な面から国際協力を行っているのですが、今回のシンポジウムで他の大学の方の活動を知り、学習支援だったり、保健教育だったり、様々な分野からアプローチできるんだということを実感しました。自分一人でできることは限られてはいますが、サークルという強みを生かして、国際協力を働き掛ける活動を今後更に展開していけたらなと思いました。本日はありがとうございました。

松成：　それぞれ違う活動をしている方だからこそ、感じることもそれぞれで、皆さんのお話からすごく刺激を受け、大変有意義な時間になりました。

まずは、日々の取り組みを着実に進めていき、さらにそれを発展させて、サークルとして、また、個人としてできることはないかということを、これからも考えていきたいと思います。本日はありがとうございました。

五嶋：　先生方や学生の発表を聞いて、私自身、とても勉強になりました。このシンポジウムのテーマである「国際協力活動のあり方」は本当にさまざまで、だからこそ、それぞれが自分たちの活動をこれからも継続していくことがとても大切だと感じました。私もさらに発展した活動ができるよう尽力したいと思います。本日はありがとうございました。

伊藤：　これまで活動してきた中で、学生の無力さを感じる場面も多かったのですが、本日、皆さん

のお話を聞いて、学生だからこそできることがまだまだあるんじゃないかな、と希望を持つことができました。津田塾大学の学生団体として、今後さらに支援範囲を拡大していけるよう精進したいと思っております。ありがとうございました。

アメリ： 他大学の方が、自分たちの中だけではなく外に向かって働きかける活動をされているのに対して、私たちのアフガニスタン勉強会は、知識とか理解を蓄えるという段階だったので、本日のパネルディスカッションを通して、今後の活動に対するヒントを得られたような気がしています。

また、他者理解や異文化交流に関して、「本当にこういう考え方でいいのかな？」と、もやもやしていた部分があったのですが、いろいろな考えを聞くことができて、少しすっきりしました。

今後、アフガニスタン勉強会の輪をお茶大生にもっと広げていけるよう、皆さんの活動を参考にしながら頑張っていきたいといます。本日はありがとうございました。

平山： ありがとうございました。

そうですね。今回のシンポジウムは、五女子大学コンソーシアムの結成20周年を記念して開催されたものですが、最後に私の個人的な意見と言いますか、希望を一つだけ述べさせていただきたいと思います。

この席にいらっしゃる皆さんは、今日パネルディスカッションのチームとして出会ってしまったわけです。五女子大学でコラボして、このような時間を作り出し共有できたこと、これも一つの大きな一歩だったのではないかなと思っています。この繋がりを今日で終わりにしてしまうのではなく、今

後、協働あるいはコラボ企画のような形で次に生かせていけると、このシンポジウムに、＋αが加わると言いますか、明るい未来に繋がるのではないかと考えています。

それでは、時間となりましたので、これで学生報告のセッションを終了させていただきます。

皆様ありがとうございました。

小田：　平山講師、五女子大学の学生の皆さん、ありがとうございました。

閉会挨拶

由良　敬　氏

お茶の水女子大学グローバル協力センター長

早稲田大学理工学部応用物理学科卒業。同大学院理工学研究科物理学及び応用物理学専攻修士課程及び名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻博士後期課程修了。博士（理学）。専門は生物物理学。早稲田大学教授（任期付）。お茶の水女子大学教授。２０２２年４月より現職。

皆様、本日は、このシンポジウムにご参加いただき、どうもありがとうございました。

改めて申し上げることではありませんけれども、女子教育の重要性というのは、強調してもし過ぎることはありません。

20年前に五女子大学コンソーシアムが発足・結成されまして、女子教育の支援に挑戦し始めたわけですけれども、それが今日、こういう形に結実しているのは、非常に意義のあることではないかと考えております。本日のご挨拶あるいはご報告では、五女子大学コンソーシアムの協定が更新されたこと、そして、アフガニスタンを忘れない、また、アフガニスタンだけではなく、他の地域の様々な困難に直面している女性たちにも支援の輪を広げていくのだと、そういうメッセージが発信されました。

そして同時に、国際協力の意義、アフガニスタンの難しさについてのご意見もいただくことができました。昨年来の急激な政情の変化によって、アフガニスタンにおける復興の道のりが更に険しいも

のとなり、女子教育を取り巻く環境も厳しくなっていることは、皆様ご承知のとおりでございます。また、他の開発途上国に対しても、国際情勢が刻々と変化している中で、どのように対応していけばよいのか、日々、悩む状況にあるかと思います。

そのような中にあっても、五女子大学コンソーシアムは、粘り強さ、それから忍耐をもって、試行錯誤を続ける姿勢を示していくことが、本日改めて確認されました。五女子大学の学生の皆さんによる国際協力活動の報告とパネルディスカッションをお聴きしていて、今後のコンソーシアムの明るい未来、道が見えたように感じた次第です。

しかしながら、この取り組みは我々だけでできることではなく、日本政府あるいは文部科学省、外務省、ＪＩＣＡなど、さまざまな方面からのご支援が不可欠であることは、改めて申し上げるまでもありません。さらに、本日、この会場にいらっしゃる皆様、そしてオンラインでご参加くださった皆様にも、是非、今後とも、五女子大学コンソーシアムを応援していただけるようお願い申し上げて、私の閉会の挨拶とさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

書　名　アフガニスタン女子教育支援 20 周年記念公開シンポジウム
紛争地域の女子教育支援を通した国際協力活動のあり方

発行日　2023 年 4 月 18 日

編集・発行　国立大学法人 お茶の水女子大学
グローバル協力センター
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
TEL/FAX　03-5978-5546
E-mail　info-cwed@cc.ocha.ac.jp
URL　https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/

編集協力　特定非営利活動法人 お茶の水学術事業会

表紙写真提供　藤枝修子（お茶の水女子大学名誉教授）

※本本書の内容の全部または一部を、無断で複写・複製・転記したり、磁気または光記憶媒体へ入力することは禁じられています。

ISBN978-4-9905741-6-1

お茶の水女子大学 グローバル協力センターは

お茶の水女子大学は、国籍・年齢を問わず、女性の成長を支援し、
その資質能力の十全な開発を企てることを使命としています。
とりわけ、本学は「女子教育を通しての国際協力」を実施可能な貢献と考え、
活動拠点として、２００３年７月に開発途上国女子教育協力センターを設置しました。
２００８年４月からはグローバル協力センターとして広く開発途上国の平和構築と、
教育を含む国際開発の課題に関する大学の教育、研究、社会貢献を推進しています。

ISBN978-4-9905741-6-1

お茶の水女子大学
Ochanomizu University